石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

仙ノ山
石銀地区墓Ⅲの調査

平成24（2012）年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

石見銀山遺跡は鉱山遺跡としては、アジアで初めて世界遺産登録された遺跡であります。また、平成22年度は充実した保護を目指すため資産の範囲を拡大しました。

鉱山活動が激減して久しい日本においては、鉱山そのものが忘れ去られようとしていましたが、石見銀山の世界遺産登録によって、現在は国内各地の鉱山遺跡にも光が当てられつつあります。

この世界遺産登録に向けて島根県と大田市では、平成９年から発掘調査や文献調査など様々な調査に取り組み、登録後においても引き続きその価値を高めるために調査を継続しているところであります。石造物調査もこの総合調査の一環として当初より取り組んでおり、これまでに銀山400年の歴史の姿を次々とかつ生々しく明らかにしてきました。

本書は、平成23年度に鉱山跡の中心である仙ノ山石銀地区で実施した石造物調査成果を中心に、報告いたします。

石銀地区墓Ⅲの調査では、17世紀前半を中心とした寺院付帯墓地とみられる石塔群を確認することができました。ここでは大型の組合せ宝篋印塔が複数造立され、石銀地区に大型の石塔を造立することができる人物の存在などが想定できるなど、多くの貴重な成果を得ることができました。

この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成24年３月

島根県教育委員会

教育長　今　井　康　雄

例　　言

1．本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2．調査した場所は以下のとおりである。

平成23年度　　仙ノ山石銀地区墓Ⅲ（大田市大森町）

3．調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査活用委員会

町田　　章（元奈良文化財研究所所長：平成23年７月31日没）
井上　雅仁（島根県立三瓶自然館学芸 GL）
大橋　泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部　　昭（元島根県教育委員会教育次長）
黒田　乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）
小林　准士（島根大学法文学部准教授）
高安　克己（島根大学名誉教授）
田辺　征夫（前奈良文化財研究所所長）
中塩　　弘（DOWA ホールディングス株式会社取締役）
仲野　義文（石見銀山資料館館長）
中村　俊郎（中村ブレイス株式会社代表取締役社長）
西村　幸夫（東京大学先端科学技術研究センター教授）
林　　秀司（島根県立大学教授）
原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）
村上　　隆（京都国立博物館学芸副部長）
和上　豊子（石見銀山ガイドの会会長）

事務局（平成23年度）

松本　岩雄（文化財課長）　　川島　　均（同文化財 GL）
若槻　真治（文化財課世界遺産室長）　林　　健亮（同専門研究員）
間野　大丞（同企画員）　　岩橋　孝典（同専門研究員）
目次　謙一（同主任研究員）　　角　　俊一（同主任）　　小杉紗友美（同嘱託）

石造物調査指導者

田中　義昭（島根県文化財保護審議会委員）

池上　　悟（立正大学文学部教授）

今岡　利江（島根県立八雲立つ風土記の丘）

調査参加者

現地調査

（石造物調査指導者）　田中　義昭、池上　　悟、今岡　利江

（島根県教育委員会）　林　　健亮、間野　大丞、岩橋　孝典、目次　謙一、小杉　紗友美

（大田市教育委員会）　中田　健一（大田市石見銀山課遺跡調査係長）、青木　俊介（同主事）

野島　智実（同技師）、新川　　隆（同調査補助員）

尾村　　勝（同調査補助員）

（立正大学考古学研究室）村山　　卓、砂生　智江

4．調査においては下記の方々から多くのご教示・ご指導を頂いた。記して謝意を表したい。

吉原道夫（石見銀山遺跡テーマ別研究客員研究員）、鳥谷芳雄（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、

5．実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町イ1597番地３）において保管している。

6．本書の執筆・編集は岩橋が行った。

本　文　目　次

第１章　調査の目的・対象・経緯 …… 1
　第１節　調査の目的 …… 1
　第２節　調査の対象 …… 1
　第３節　調査の経緯 …… 1
第２章　石見銀山遺跡の位置と歴史
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　石銀地区墓Ⅲの調査
　第１節　石銀地区の概要 …… 5
　第２節　石銀地区墓Ⅲの概要 …… 6
　第３節　調査の経過 …… 6
　第４節　確認された石造物の概要 …… 8
　第５節　墓地と石造物の配置 …… 8
　第６節　各種墓石の様相 …… 11
　第７節　石銀地区墓Ⅲの調査のまとめ …… 13

挿　図　目　次

第１図　石見銀山遺跡の範囲図
第２図　石見銀山遺跡仙ノ山周辺図
第３図　仙ノ山地区地形図
第４図　石銀地区地形図
第５図　石銀地区墓Ⅲ詳細地形実測図Ｓ＝１/300
第６図　石銀地区墓Ⅲ３ＡＢＣＤ群石造物実測図Ｓ＝１/10
第７図　石銀地区墓Ⅲ３ＥＦ群石造物実測図Ｓ＝１/10
第８図　石銀地区墓Ⅲ３Ｇ群①石造物実測図Ｓ＝１/10
第９図　石銀地区墓Ⅲ３Ｇ群②石造物実測図Ｓ＝１/10
第10図　石銀地区墓Ⅲ３Ｇ群③石造物実測図Ｓ＝１/10
第11図　石銀地区墓Ⅲ３Ｈ群・６群①石造物実測図Ｓ＝１/10
第12図　石銀地区墓Ⅲ５群・６群②石造物実測図Ｓ＝１/10
第13図　石銀地区墓Ⅲ８群①・１群・２群・11群石造物実測図Ｓ＝１/10
第14図　石銀地区墓Ⅲ８群②石造物実測図Ｓ＝１/20
第15図　石銀地区墓Ⅲ９群①石造物実測図Ｓ＝１/10
第16図　石銀地区墓Ⅲ９群②石造物実測図Ｓ＝１/10

第17図　石銀地区墓Ⅲ10群石造物実測図S＝1/10. S＝1/20
第18図　石見銀山遺跡の大型組合せ宝篋印塔比較図（17世紀）S＝1/20

表　目　次

第1表　石見銀山遺跡に所在する組合せ宝篋印塔比較表（17世紀）
第2表　墓石銘文一覧表

写真図版目次

図版1　石銀地区墓Ⅲ1・2・3群石造物
図版2　石銀地区墓Ⅲ3群石造物②
図版3　石銀地区墓Ⅲ3群石造物③
図版4　石銀地区墓Ⅲ3群石造物④
図版5　石銀地区墓Ⅲ3群石造物⑤
図版6　石銀地区墓Ⅲ3群石造物⑥
図版7　石銀地区墓Ⅲ3群石造物⑥・5群石造物
図版8　石銀地区墓Ⅲ5群石造物②・6群・8群石造物①
図版9　石銀地区墓Ⅲ8群石造物②・9群石造物①
図版10　石銀地区墓Ⅲ9群石造物②・10群石造物

凡　　例

・石銀地区に存在する石造物及び石見銀山遺跡の関連品を掲載した。
・各石造物の規模は基本的に全高及び最大幅、墓標の幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を残存高または各部材毎の高さで掲載した。
・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は[　]で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は　](上欠)、[　(下欠）と示した。また推定できる文字は□内に入れて表示した。
・戒名及び名字は○○○とした。
・掲載していない石造物についても実測台帳は保管し、今後の研究の資料とした。
・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

第１章　調査の目的・対象・経緯

第１節　調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世）、さらには近代へと長期にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山にいたるまでに、繁栄期・停滞期・衰退期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第２節　調査の対象

一概に石造物といっても①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことであるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の４つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）がより直接的に反映されていると考えられるとの理由から、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとしている。

第３節　調査の経緯

石造物調査（墓石）は島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のために、昭和60年度に徳善寺跡などについて、天正から慶長年間の紀年銘が存在する墓石を中心に一部の確認調査を実施したことがその始まりである。

平成９・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を押えるため、紀年銘がある墓石の調査を重点的に進められたが、墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の３つの調査を総合的に行うこととなった。

①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要な箇所を判断する材料を得るため分布調査。

②特徴的な墓地については構造や変遷を把握するために詳細な悉皆調査。

③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら３つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満

たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵蕚寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成23年度は、以前に分布調査を行っていた石銀地区（墓Ⅲ）の悉皆調査を実施することとした。石銀地区は鉱山業の中心の一角で、平成22年度に墓Ⅱ・Ⅳの悉皆調査を実施していることから、石銀地区の墓群の全体像を解明する為に古層の大型石塔の多く所在する墓Ⅲの調査は必須であった。

[参考文献]

1 島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』

2 島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山』第3分冊

3 島根県教育委員会他1999「民俗調査・港湾調査・街道調査編」『石見銀山』第6分冊

4 温泉津町教育委員会1999『1999　温泉津』

5 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1－妙正寺－』

6 島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2－龍昌寺跡－』

7 島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3－安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外－』

8 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4－長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家－』

9 島根県教育委員会2004『石見銀山街道－鞆ケ浦道・温泉津沖泊道調査報告書－』

10 島根県教育委員会2005『石見銀山街道－鞆ケ浦・沖泊集落調査報告－』

11 島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5－分布調査と墓石調査の成果－』

12 島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6－温泉津地区恵蕚寺墓所－』

13 島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7－温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（1）－』

14 島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8－温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（2）－』

15 島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書9－西念寺墓地（3）・安原備中墓・大光寺墓地－』

16 大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区　保存対策調査報告書（補訂版）』

17 島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10－金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物－』

18 島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11－極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区』

第２章　石見銀山遺跡の位置と歴史

第１節　遺跡の位置と環境

（１）銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の３国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置している。

東隣の出雲地域では、斐伊川・神戸川をはじめとする河川によって、まとまった沖積平野が形成されている。これに比べて石見では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており大規模な沖積平野は見られない。海岸部にまで迫る山塊群に象徴されるように古くは「石海」「石美」に石見の語源があるともいわれている。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山は、「溶岩円頂丘」または「トロイデ式火山」と呼ばれ、粘性が高いデイサイトで形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床型の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という２つの鉱床が知られている。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まないとされる。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀などが含まれる。

（２）銀山の歴史的背景

石見銀山遺跡は、周辺の歴史においても地形的な要因から独特ともいえる特色を有している。以下に石見銀山周辺の歴史的な環境を概観してみたい。

石東地域では縄文・弥生時代の発掘調査例が少なかったが、近年の仁摩温泉津道路に伴う発掘調査などで資料が増加してきている。大田市仁摩町では、潮川流域で古屋敷遺跡、五丁遺跡群、川向遺跡などで弥生時代前期からの遺物・遺構が見つかっているほか、大田市鳥井町鳥井南遺跡では、日本海を望む丘陵上で弥生時代～古墳時代の定穴住居跡等が多数検出されている。大田市仁摩町大国の庵寺古墳群では、古墳時代前期末の精緻な箱形石棺が見つかっており、副葬品に中国前漢で製作された八禽鏡が納められていた。

平安時代前半期の遺跡では、緑釉陶器が出土した大田市仁摩町殿屋敷遺跡や円面硯が出土した大田市長久町八石遺跡が注目される。これらの遺跡は、中世前期の貿易陶磁も出土していることに加えて、河口に近い川岸という立地からも海上交通の存在を予感させるものである。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約１kmの地点に位置する白坏遺跡では、古墳時代の住居跡の他に、奈良・平安時代の建物跡や木簡が多数出土している。

平安時代末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立しており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。仁摩町天河内の白石遺跡、清石遺跡は、12～14世紀にかけて継続する遺跡であるが、総柱構造の主屋をもつ居宅遺構が検出されており、貿易陶磁器も一定量出土していることから、清原（久利・仁万）氏など在地有力武士層の関与が考えられる。また、仁摩町馬路の牧原Ⅱ遺跡では、13世紀代の鈩関連遺物が多量に出土しており、鉄生産も活発に行われていたことも知られている。

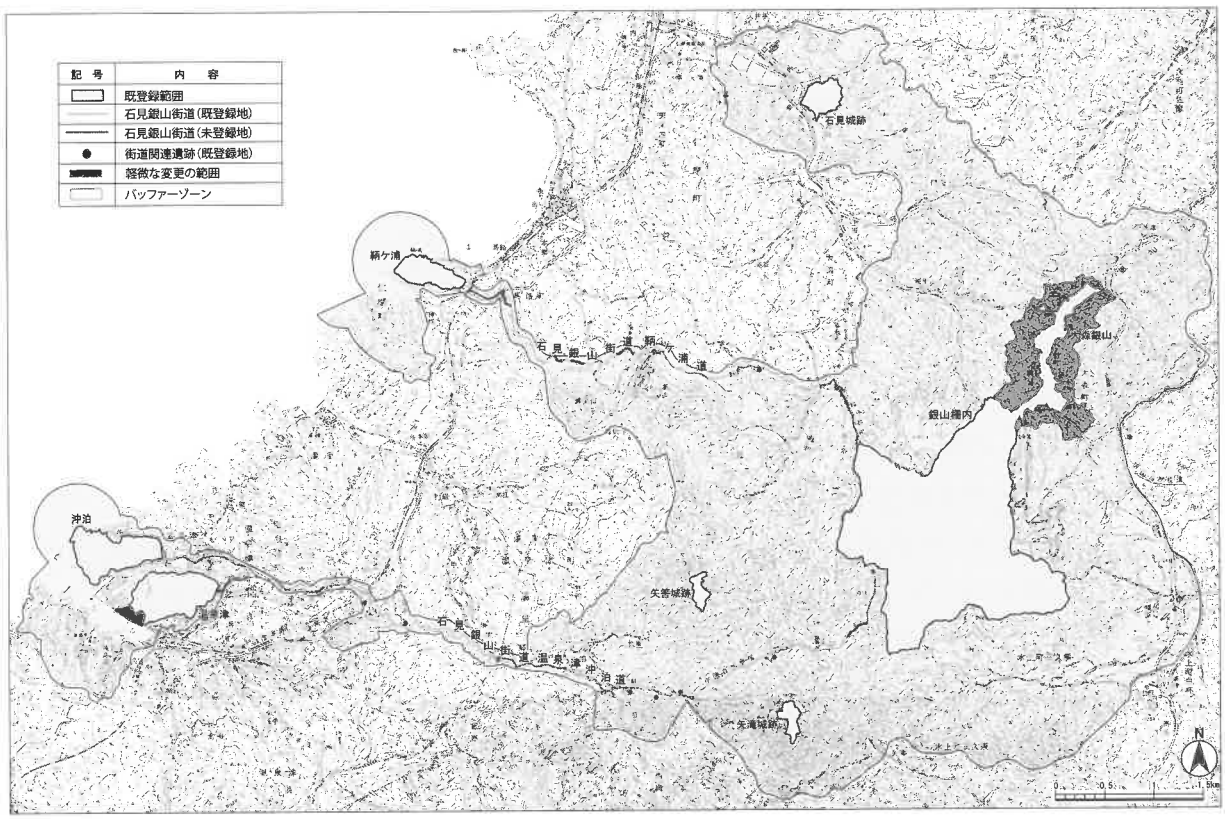
南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見守護を兼任するが、応永の乱（1399）で大内義弘が堺で戦死し石見守護職を没収される。しかし、義弘の弟の盛見は、応永８（1401）年に

は大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間(1504-1521)に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回し、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われた。

温泉津町湯里の湯里天神遺跡では15世紀代を中心とした畠遺構が検出されている。ここでは、牛の足跡や犂跡が多く見つかっており、牛耕が確認される他、低層の石垣によって耕作地が区画されており、現代に繋がる棚田・段々畠景観が15世紀には形成され始めていたことが知られる。象眼青磁など貿易陶磁が一定量存在することから、温泉郷領主の温泉氏が関与する遺跡と考えられる。

天文6（1537）年以降、大内氏、尼子氏、小笠原氏、そして毛利氏が銀山領有をめぐって争奪戦を繰り返した。それに伴う多数の城館が銀山周辺や街道沿い、港周辺に遺されている。1560年代前半には、毛利氏が尼子氏方との銀山争奪戦を有利に展開し、石見銀山の支配権を徐々に確立した。

慶長5(1600)年9月の関ヶ原の戦い直後に、徳川家康は石見銀山に禁制を発し、いち早く直轄化を図った。江戸期に入ると安濃郡と邇摩郡は幕府直轄の石見銀山領となり明治維新を迎えている。



第1図　石見銀山遺跡の範囲図

第３章　石銀地区墓Ⅲの調査

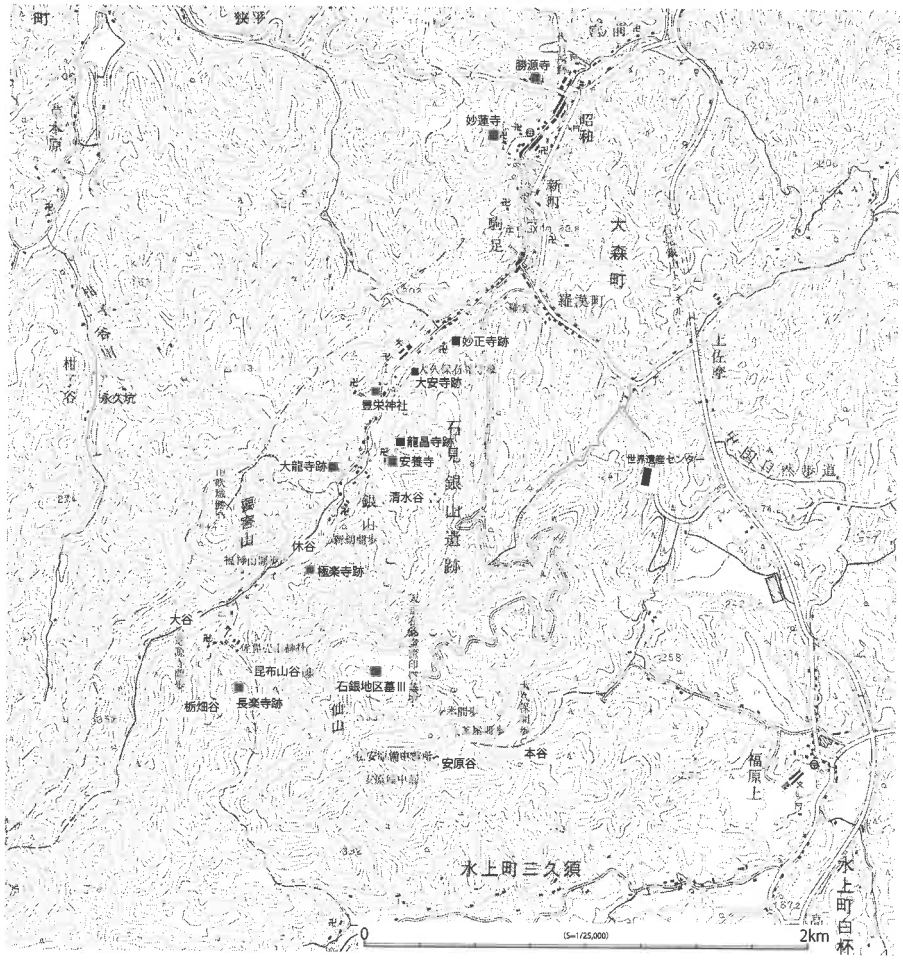
第１節　石銀地区の概要

石銀地区では、平成９年度に石造物分布調査が実施された。石銀地区は、仙ノ山山頂近くの標高460～480m付近にある広大な平坦面である。ここでは平成８～10年度に発掘調査が行われ、銀製錬を行った可能性のある建物跡を含む建築遺構、道路遺構など17世紀前半の遺構群が調査された。平坦面を取り囲むようにいくつかの小高い丘陵地が見られるが、これらの尾根上や斜面部分が墓地として利用されている。

平成22年度は石銀藤田地区と千畳敷の中間に位置し、石銀地区のほぼ中央の独立丘陵上に存在する墓Ⅱを調査している。墓Ⅱでは３基のマウンドが造られており、北端の１基は自然地形を加工するが、南の２基は基部に石列を備えた方形基壇を構築し、内側にはズリを充填している。墓塔は倒壊しているが、大型組合せ篋印塔２基（1618年、1621年）、一石宝篋印塔１基、一石五輪塔１基が報告されている。組合せ宝篋印塔は復元すると総高180cm～190cmとなる。大安寺跡には、大久保長安の当初の墓塔と推察される組合せ宝篋印塔の笠部～相輪部が遺存し、復元総高は206cmとされるが、石見銀山内ではそれに次ぐ規模の巨塔である。

また。墓Ⅱから平坦地を隔てた北側の小丘陵上に所在する墓Ⅳの調査も行っている。

平成23年度は、於紅ヶ谷から石銀平坦面に登った際に、平坦面の西側の丘陵斜面に位置する墓Ⅲについて悉皆調査を実施した。



第２図　石見銀山遺跡仙ノ山周辺図

第２節　石銀地区墓Ⅲの概要

墓Ⅲは、石銀千畳敷を見下ろす標高480～510mの斜面を雛壇状に造成した複数の平坦面に分布している。墓の西側に隣接する標高480m付近と490m付近の位置には、墓石の見られない大きな平坦地が２ヶ所（標高481m前後の箇所で幅47m×奥行13m、標高490m前後の箇所で幅32m×奥行20m）あるので、ここが寺院跡ではないかと推定される。

雛壇状の平坦面は、便宜的に１群～11群にグルーピングして調査を実施した。その内、１群、11群は寺院跡と考えられる広い平坦面に少数が点在することから、上方の３群からの転落品と考えられる。

墓Ⅲでは、墓石は全て倒壊して、バラバラになっているので元々の組合せが解らないものもあるので、個別の石材ごとに約117個を実測した。石材の組合せを整理すると一石五輪塔２基、一石宝篋印塔13基、三石宝篋印塔１基、組合宝篋印塔33基、無縫塔５基の計54基分が確認された。本来はこれよりも多い数の墓塔が造立されていたと考えられる。

また、自然石を用いて各辺の長さが１～２mの石組基壇が17ヶ所以上確認され、本来は石囲基壇上に樹立された石塔もあったものと思われる。

平成９年度に実施された分布調査時に記録されているもので、今回確認できていないもの（一石五輪塔２基、一石宝篋印塔１基、組合宝篋印塔５基）があるほか、逆に平成９年度には未確認で今回確認したものある。土や落葉に埋もれて確認できなかった個体が複数個体はありそうである。（平成10年度調査では122基として報告されている。）

第３節　調査の経過

平成23年度の調査は、６月13日の石造物調査指導会において、古層の石塔がまとまって存在し、個体数が適当な場所にすることを決め、石銀地区墓Ⅲの墓石を対象として実施する方針が決められた。

平成17年度～22年度までの石造物調査は、温泉津地区の寺院の悉皆調査を中心に行っているが、調査当初に行った大田市大森町石銀地区の悉皆調査が長年懸案としてあげられていた。平成９・10年度当時は竹藪のため十分な調査ができず、現在の調査基準で調査を行うことが課題であった。また、銀山地区では銀山川がおりなす谷部の寺院を中心に悉皆調査を実施してきた。しかし、石銀地区は発掘調査の成果などから江戸時代初頭には道路の両側に家々が並ぶ鉱山町として機能していたことが判明し、当時の景観や土地利用を考える上でも悉皆調査の必要性は説かれていた。平成23年度は、昨年度に続き大田市教育委員会により石銀地区の発掘調査が行われることとなり、調査環境も整った。

石銀地区墓Ⅲの調査は８月24日～８月27日には立正大学・池上悟教授及び大学院生２名、八雲立つ風土記の丘・今岡利江氏にも参加していただき、調査の効率化を図った。

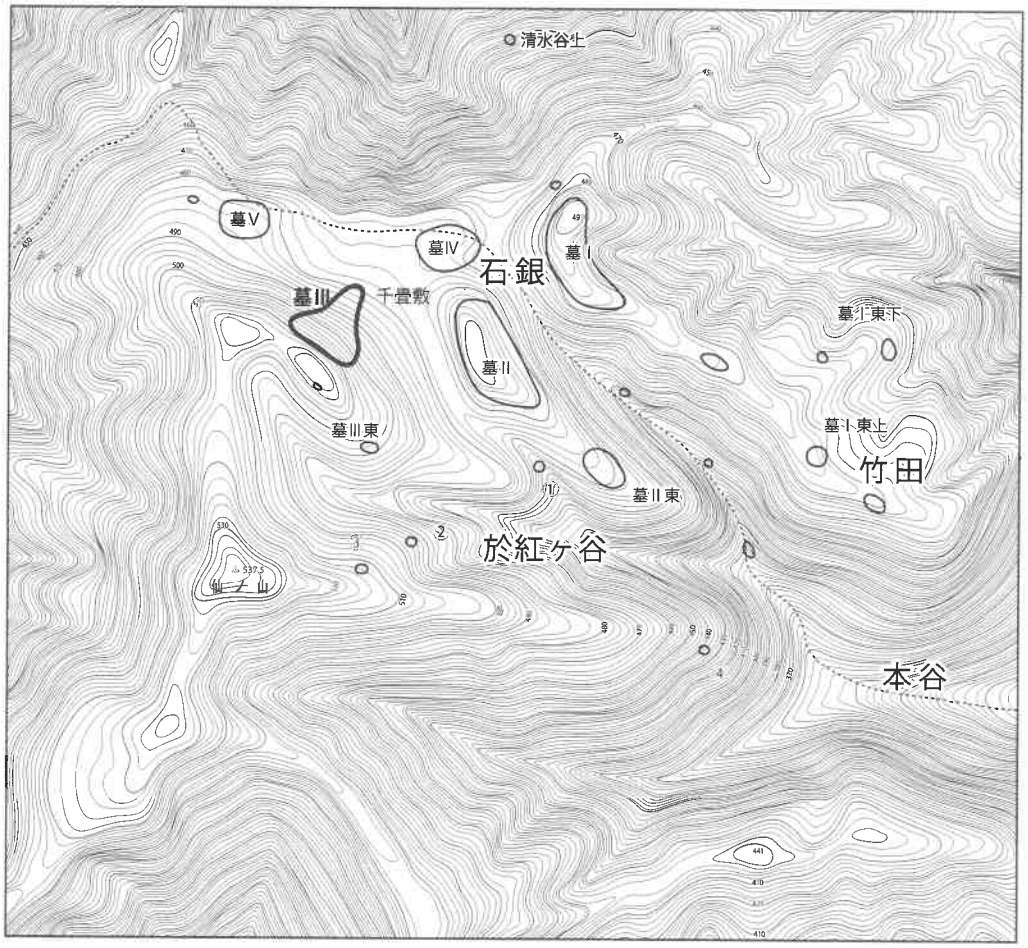
以後、資料整理を行い、報告書作成を行った。なお、石銀地区の石造物については、グルーピングを中心にした紹介や墓Ⅱ・Ⅳの調査報告がなされている（田中1999、島根県教委2010）。

［参考文献］

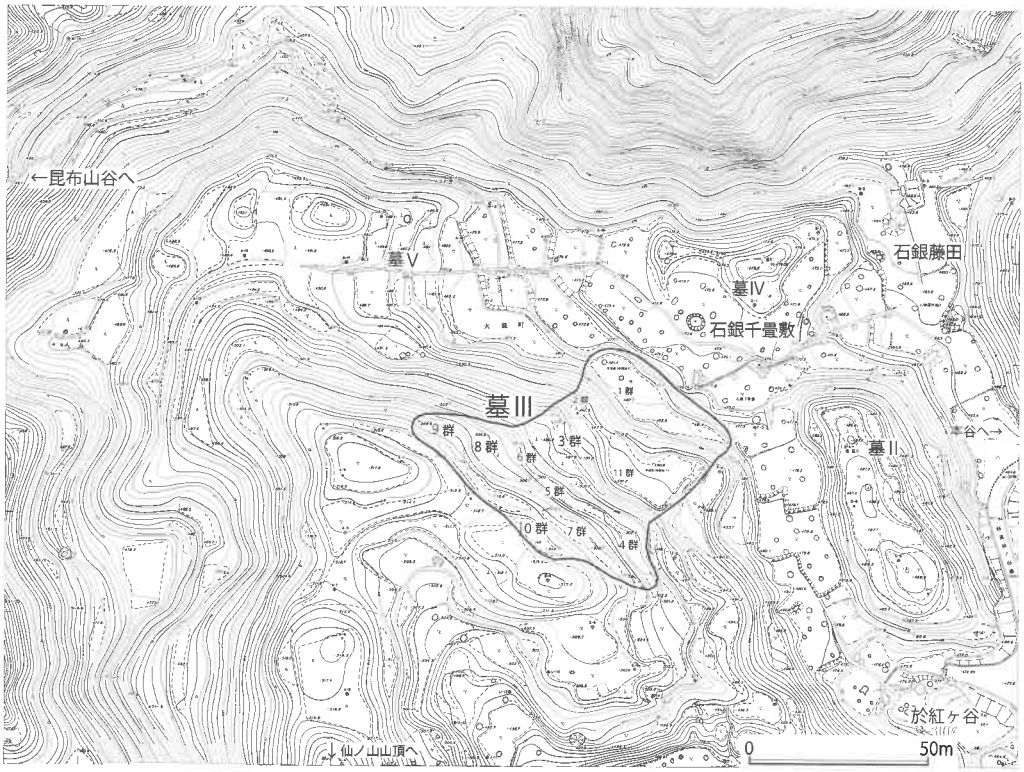
田中義昭編1999「石造物調査報告書」『石見銀山遺跡総合調査報告書　第３冊』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10－金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物－』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11－極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区－』



第3図　仙ノ山地区地形図



第4図　石銀地区地形図

第４節　確認された石造物の概要

石銀地区墓Ⅲでは今回の調査において、いくつかの石塔形式の存在を確認することができた。ここでは、各墓石の様相について記す前に、石銀地区墓Ⅲにおいて確認できた形式について、その概要を記すこととしたい。なお、基本的に石材は、地元石材である福光石である。

一石宝篋印塔

方柱状の石材を、上から相輪・笠・塔身・基礎に加工して造作された墓塔である。これまでの調査で石見銀山においては、この形式が中世末期から近世初頭に主体を占めることが明らかとなっている。石銀地区墓Ⅲにおいては、13基確認された。

一石五輪塔

一石宝篋印塔と同様、方柱状の石材を加工するもので、上から空輪・風輪・火輪・水輪・地輪が造作されている。３群の中に２基確認された。

組合せ宝篋印塔

塔を構成する相輪・笠・塔身・基礎がそれぞれに造作されたもので、それらが組み合わされることにより完成する墓塔である。その特性ゆえに本来の組み合わせを維持したまま樹立しているものはないため、実数の把握は難しい。笠部が33基分、相輪部が26基分確認されており、最小でも33基は造立されていたと考えられる。

また、特異な事例として、基礎と塔身が一石で作り出された例（3-38）がある。

無縫塔

円柱状石材の先端部を尖らせ、下部を窄ませるように造作した部分と、円形あるいは方形の台座、または蓮台からなるものである。僧侶階層の墓塔として採用されたもので、石銀地区墓Ⅲにおいても、墓群前面にある推定寺院跡の歴代住職の墓所として造立されたと判断される。現在５基が確認されている。

第５節　墓地と石造物の配置

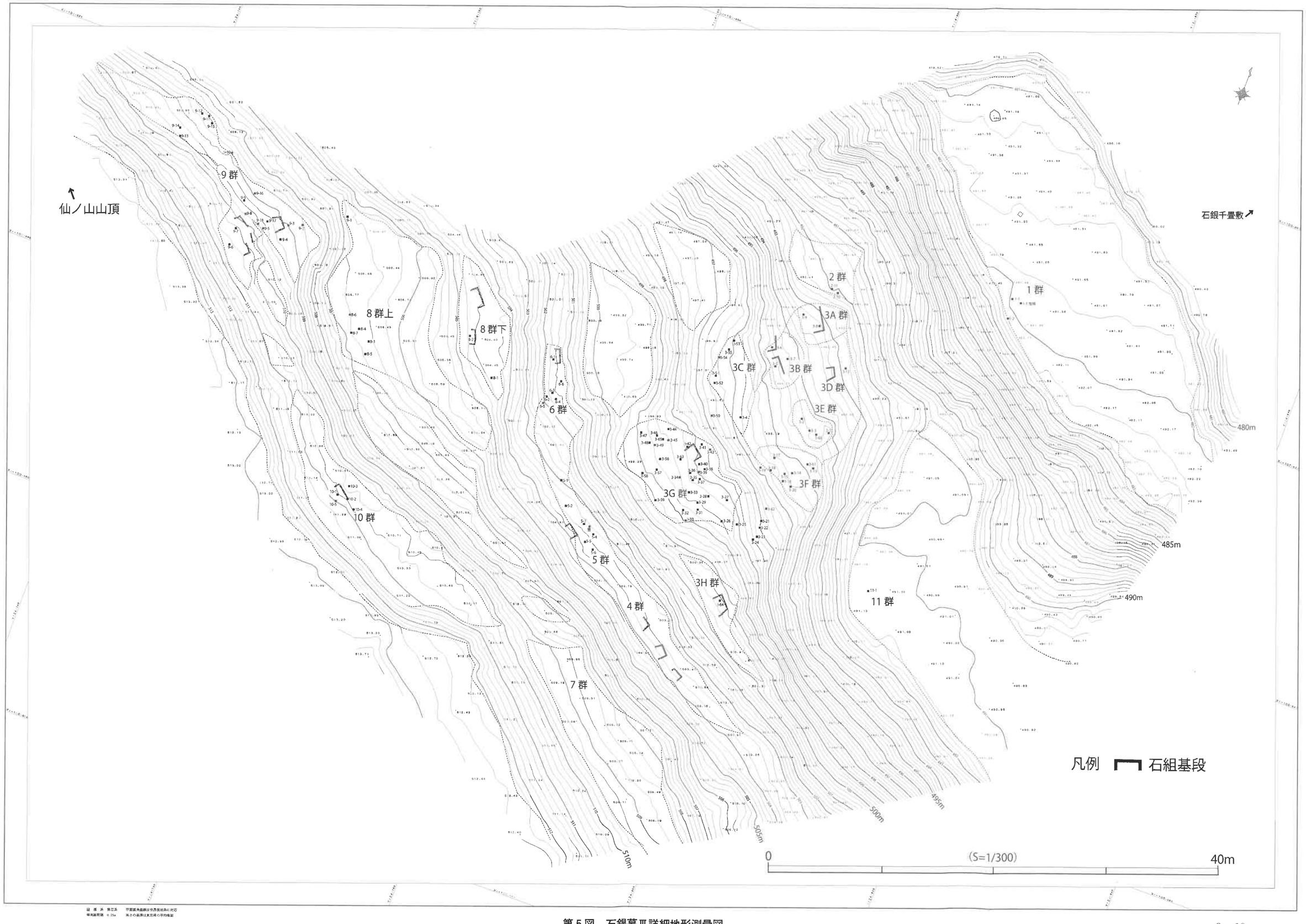
前述のように11群にグループ分けしているが、最高所に所在する10群・９群から紹介することとする。

10群は、丘陵斜面最高所の標高512m付近の平坦面（長さ約15m、幅５m）に所在し、基壇を伴う大型の組合せ宝篋印塔２基以上からなる。９群は、10群から30m余り北西に離れた標高508～511m付近に平坦面（長さ約25m、幅６m）を持ち、基壇３基以上、組合宝篋印塔７基以上からなる。９群・10群は、墓Ⅲの墓群中で標高の最も高い最奥部に位置し、一石宝篋印塔・一石五輪塔などの小型塔を含まず大型塔を中心に構成されることから墓Ⅲ造立の契機となった初源墓群と考えられるが、紀年銘のある石塔が確認されていないため推測に留まる。

また、石銀地区墓Ⅱでは全方位に見通しのきく丘陵の頂部に基壇を設けて造墓を行っているが、墓Ⅲでは尾根頂部には造墓されない。尾根上は道として利用されている可能性があるほか、尾根の反対側も土地利用されているため頂部の墓域利用はできなかったと考えられる。

８群は、標高504～506m付近にあり、群内で基壇を伴う組合せ宝篋印塔１基、一石宝篋印塔１基で構成される下段と、無縫塔１基、一石宝篋印塔１基、組合宝篋印塔２基からなる上段に分かれている。８群では、紀年銘がある墓石が３基あり「寛永２年（8-6）」「承応４年（8-1）」「萬治２年（8-2）」が確認できる。

７群は、標高508m前後の高さに所在する長さ40m、幅３～５mの平坦面であるが、基壇や石材は確認できていない。４群～６群は、標高標高502～504m前後に連続的に60mほど延びる平坦面に造られた墓群である。４群では３ヶ所で一辺1.5m弱の石囲い基壇が見られるが、石塔の部材は確認できなかった。転落か移転の可能性がある。



第5図　石銀墓Ⅲ詳細地形測量図

5群では無縫塔1基、組合せ宝篋印塔3基が確認された。6群では基壇を伴う組合せ宝篋印塔3基が確認されている。

3群は標高492～500mと比較的標高差がある中に、30×20mの範囲に8ヶ所前後の小グループ（A～H）となって多くの石塔が造立されている。北西端には石造物が全く造立されない区画があり、墓域内での土地利用に区別があることがうかがえる。3群では、無縫塔3基、一石宝篋印塔9基、一石五輪塔2基、三石宝篋印塔1基、組合せ宝篋印塔17基以上が確認されている。

紀年銘は無縫塔で「元和3年（3-33）」、一石宝篋印塔で「慶長2年（3-48）」「慶長4年（3-51）」「慶長5年（3-14）」「寛永17年（3-17）」「寛永19年（3-1）」、一石五輪塔で「慶長□（3-2）」、三石宝篋印塔で「慶長2□年（3-38）」、組合せ宝篋印塔で「元和□（3-64）」がみられる。

2群は、3群の北側に隣接し、3群との標高差は50cm程度である。一石宝篋印塔1基（「寛永14年」（2-10））と組合せ宝篋印塔の笠部が1基所在する。

第6節　各種墓石の様相

石銀地区墓Ⅲで確認できた石塔は4種類で、その他に石塔の下に敷く台（板）石がみられる。（第6～17図）。以下、個別に様相を述べる。

一石五輪塔は、3群に2基がみられる。（3-2・第7図）はEグループにあり、地輪の一部を欠損する。火輪・地輪の幅が19cmで、地輪が22cmとやや縦長である。「慶長□」の紀年銘を持つ。（3-3）はEグループにあり、空風輪を欠損する。火輪・地輪の幅は20cmで、地輪の高さは24cmである。銘文は確認されていない。

一石宝篋印塔は、1群に1基（1-1）、2群に1基（2-10）、3群に9基（3-1.14.17.26.27.40.48.51.56）、8群に2基（8-1.6）の計13基が確認された。

紀年銘は基礎に刻まれ、（1-1.2-10.3-1.14.17.48.51.8-1）に確認できる。

（3-48）が慶長2（1597）年、（3-51）が慶長4（1599）年、（3-14）が慶長5（1600）年、（1-1）が元和9（1623）年、（2-10）が寛永14（1637）年、（3-17）が寛永17（1640）年、（3-1）が寛永19（1642）年、（8-1）が承応4（1655）年で、一石宝篋印塔の造立年代の1つの指標となる。慶長期に製作された（3-48.51.14）は、基礎部の立面が正方形に近いが、元和9年の（1-1）では基礎が縦長になり、新しくなるにつれ基礎が縦長になるというこれまでの研究状況に合致する。また、慶長期（毛利氏支配期）に製作された（3-48.51.14）は、相輪部の伏鉢が表現されているが、元和以降に製作された5基では伏鉢に相当する場所に請花が施されており、慶長－元和間で型式変化が起きることを示す可能性がある。

組合せ宝篋印塔は、1群に相輪1基、2群に笠部1基、3群に相輪17基、笠部17基、5群に相輪2基、笠部3基、6群に相輪1基、笠部3基、8群に笠部3基、9群に相輪3基、笠部7基、10群に相輪1基、笠部2基、11群に笠部1基が確認された。笠部の合計が33基、相輪部が26基であるので、最小でも33基が存在することになる。また、基礎と塔身が一石で作り出された特殊なものが1基（3-38）確認されており、慶長二□年の紀年銘を持っている。

各部位が別造りのため本来の組合せや数量を確認することは難しい。わずかに相輪が笠にセットされた状態に近いかたちで確認できるものがあり、本来の組合せの可能性が想定できる。**基礎**は（6-2.6-5）や（8-2）にも確認できる。紀年銘は3-64（元和□）のみで確認される。

製作年代は、基礎上部の反花座が簡略化され、正面の格狭間表現や縦蓮子の消失から17世紀的な新しい様相を見て取れる。**塔身**の残存状況は悪い。方形の石材であり転用されることが多く、残存し

にくいと思われる。**笠**は、軒下の縦蓮子を表現するものは無く、請花蓮弁を持つもの③と何も表現しないもの②、に２分される。蓮弁を持つものは、全て間弁を表現しており、間弁が消失したものは見られなかった。隅飾り内側に表現された線刻の輪郭は先端が大きく蕨手状に巻き込むものが多い。

隅飾り間に表現された段級数は二段が基本であるが、三段（9-1.9-9.9-11.）も存在する。隅飾り端間での最大幅が50cmを越える個体は、10-1が59cm、9-2・3が56cm、9-9が55cmであり、この３個体は石銀地区墓Ⅱの個体よりも大きい。

相輪は、基本的に先端の宝珠と請花、九輪部、下部の請花と突帯と伏鉢からなる。型式は、②宝珠の下に蓮弁の請花を持ち、素面の九輪部の下端に請花を表し、突帯を挟んで最下部に伏鉢を造作するもの（9-8など）、③宝珠の下に蓮弁の請花を持ち、素面の九輪部の下端に請花を持たず、突帯を挟んで伏鉢を造作するもの（3-21.3-37・41.3-39.3-49）に２分される。②類が21個体、③類が４個体であり、突帯の位置や相輪全体の長さや幅などで細分はできる。②と③では表現の簡略化から③が後出と想定される。

ただし、龍昌寺跡の調査報告では③のような伏鉢＋突帯の上部に請花を持たない相輪は，慶長11（1606）年以降の造立と考えているが、②のように伏鉢＋突帯の上部に請花を持つ相輪は石銀地区墓Ⅱでは、1618年、1621年の紀年銘を持つものが確認されており、少なくとも慶長10年代～元和年間は両者が共存している可能性が高い。（島根県2002.2011）

②類では、ほぞ部分を含まない実高が70cmを越えるものとして、3-5（74cm）、5-4（59.5cm＋伏鉢）、6-2（70cm）、9-1（65.5cm＋伏鉢）、9-8（88cm）、9-13（70cm）、10-2（31.5cm＋九輪宝珠部）があり、③類では、3-49（71.2cm）があげられる。

紀年銘がある基礎は3-64「元和□」、8-2「萬治２（1659）年」の２基がある。

復元総高は、いずれも基礎の下に板状の台座が付くものと仮定して、3-64、5-3、6-2、が160cm前後、5-4.5.6、9-2.3、9-12.13が178cm前後、9-8が200cm前後、10-1が210cm前後となる。石銀地区墓Ⅱに存在する180～190cm前後の宝篋印塔２基や、龍昌寺J地区岩窟内の元和３年銘の２基と比類すべき大型塔が複数存在することとなる。さらに、9-8や10-1は大安寺跡に所在する当初の大久保長安の墓塔と推定される組合せ宝篋印塔に匹敵する規模となる。

石銀地区墓Ⅲに所在する組合せ宝篋印塔の特徴として、相輪部の長さが石見銀山内部の事例と比較しても特段に長い傾向にあることを指摘できる（第１表）。石銀地区墓Ⅲの場合、笠高１に対して相輪部高は平均で2.53を示している。総高120cm以上の中型品で比較して、石銀墓Ⅱ・安原谷の宝篋印塔は、笠高１に対して相輪部高は平均で2.28である。大森地区の宝篋印塔は、笠高１に対して相輪部高は平均で2.16であり、港湾である温泉津港では笠高１に対して相輪部高は平均で1.98となる。

このように、17世紀前半段階の福光石製組合せ宝篋印塔では、全体的な様式は定まっているが総高に対する各部材の高さ・幅の規格性は低い。特に大型製品ではシステマチックな規格品ではなく、発注者の意向や石工職人の経験・流儀などに左右される部分が大きいものと推定される。

無縫塔は、３群に３基（塔身3-31.3-35.3-36、基礎3-33）、５群に１基（5-1）、８群に１基（塔身8-3.基礎8-5）所在する。

無縫塔の基礎は方形の台座（3-33）と一段の蓮弁を伴う台座（8-5）がある。塔身は基部直径が小さく、頂部にかけて径が大きくなる。（3-35.5-1.8-3）は、側面が直線上であるが、（3-31.3-36）は側面が内反りにカーブしながら立ち上がる。頂部は丸いものや三角形に近いもの（8-3）など形

態差は大きい。紀年銘では(3-33)が元和3(1617)年である。

その他の石造物として（9-7・第16図）組合せ宝篋印塔の反花座付基礎台座である。4分割して製作していると見られ、右前部分が現存している。前面には水受けと花入れ用の孔を設けており、推定復元で幅82cm、奥行き97cmになる。類例として、石銀地区墓Ⅱの組合せ宝篋印塔例があるが、こちらは水受けや花入れ孔がなく、幅は62cm四方ほどである。

（9-17）は別個体であるが反花座付基礎台座である。

[参考文献]

島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2－龍昌寺跡－』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3－安養寺・大安寺跡・大龍寺跡・奉行代官墓所外－』

池上悟2010「温泉津地区における特徴的な墓石」『石見銀山遺跡石造物調査報告書10－金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物－』島根県教育委員会・大田市教育委員会

第7節　石銀地区墓Ⅲの調査のまとめ

石銀地区墓Ⅲの調査は、石材117個を実測した。

墓塔としての組合せでは、一石宝篋印塔13基、三石宝篋印塔1基、一石五輪塔2基、組合せ宝篋印塔33基、無縫塔5基が確認できた。

◆造墓時期

最古の紀年銘は慶長2（1597）年の一石宝篋印塔（第10図3-48）である。一石五輪塔の数は少ない。平成10年度調査時と比較して、一石五輪塔2基、一石宝篋印塔1基、組合せ宝篋印塔5基が今回調査で確認されておらず、埋没している個体や人手により移動された可能性もある。

紀年銘は、14基出確認された。慶長は5基（2年、4年、5年、2□年、不明）、元和は3基（3年、9年、不明）、寛永は4基（2年、14年、17年、19年）、承応は1基（4年）、萬治は1基（2年）である。紀年銘で見る限り墓地の造立期間は16世紀末～17世紀半ば過ぎまでの62年間である。石塔の型式をみても、新相の墓標系のものは一切見られないことから1659年前後を石塔造立の下限とみて大過ないであろう。

石見銀山遺跡での墓塔型式の変遷では、17世紀中頃～後半に中世的な一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合宝篋印塔が衰退し、替わって円頂方形、円頂方柱墓標などを主体とする墓標系墓塔への移行が認められる。石銀墓Ⅲで新相の墓標系墓塔が確認できないことは、石塔紀年銘の状況とも符合している[1]。

◆寺院について

また、戒名に「○譽」が付く例が6例、「○○禅定門」が2例、「○○信女」が2例ある。その内、無縫塔（3-33）には「元和三□五月・・　相譽・・」の銘がある。これらの戒名は浄土宗に通例であることから、墓域の前面に想定される寺院は浄土宗寺院であった可能性が考えられる。

石銀地区にはいくつかの寺院が所在したと考えられるが、『石見銀山百か寺』などの記載を見る限り浄土宗寺院で17世紀後半に石銀地区から移転した伝承を持つのは「報恩寺」のみである[2]。

大超山護念院報恩寺は、永禄元（1558）年に一蓮社心譽上人専察和尚によって石銀地区に創建されたと伝えられている。元禄2（1689）年に石銀から現在地の大田市五十猛町畑井に移転している。墓Ⅲの紀年銘は、報恩寺が石銀地区に所在した期間に納まっており、当地が旧報恩寺であった可能性はあるが、現段階では検証が困難である。

◆群内の階層性

1～11群に細分した小群を再整理すると、超大型塔が存在し墓群内最高所（標高511～512m）に所在する9・10群、広い平坦面に小規模な石塔が散在する8群、標高502～504m付近に細長く分

布し大型塔が含まれる５・６群、墓群の最下段に位置し中小規模の石塔が密集する２・３群（１・11群含）に大別される。

中世墓地では丘陵の最高所に大型の始祖墓が最初に造立され、その下方や側方に順次累代墓や家族墓が造立される傾向がある。

石銀地区墓Ⅲでは、石塔の大きさでは上方の群から特大→中小→大→中小、という構造になっている。そして最上段の９・10群は明らかに南北に分離して立地しており始祖墓的な墓が２系統存在する可能性がある。また、墓群全体の中央部を横断するように細長く選地している５・６群は大型塔で構成されることから、別グループの始祖墓として位置づけられる可能性がある。

そして、９・10群の直下に所在する８群は、確認される紀年銘が「寛永２（1625）年」「承応４（1655）年」「萬治２（1659）年」と墓Ⅲ全体の中では新相に属している。この傾向を重視すれば、墓９ないし10群の系譜に連なる家族墓として位置付けられる可能性がある。

このような観点で見ると、一連の墓群としている墓Ⅲは、３ないし４つの始祖墓→累代・家族墓の集合体と解釈できる可能性がある。発掘調査を経ない表面観察であるので断定することはできないが一つの可能性として提示することはできよう。

◆石銀地区墓Ⅲの被葬者について

復元総高が200cmを越えるような超大型塔の存在や、同じく復元総高が160～170cmクラスの大型塔が複数存在することから、当墓地の造立主体の経済力の大きさを知ることができる。石銀地区に墓域を形成する階層について具体的に示されるような史（資）料はないが、代官墓・奉行墓・地方役人墓をはじめ支配階層の武家の墓地が銀山川流域の寺院付帯墓地にあることを考慮すれば、実際に鉱山業の元締め役であった山師の家族墓である可能性が考えられる。石塔造立の背景や被葬者像など解明すべき課題が多く提出されたが、発掘調査や文献調査など総合的なアプローチを行うことが重要となってくるであろう[3]。

◆石見銀山遺跡の大型石塔について（第18図）

温泉津などの港湾を含んだ石見銀山遺跡では、16世紀末～17世紀中頃にかけて大型の組合せ宝篋印塔が造立される。近年調査を実施した石銀地区墓Ⅱ、墓Ⅲが仙ノ山の産銀地域に所在する大型塔である。また、代官墓としては、前述した大安寺跡の推定・大久保長安墓（第20図-96.1613年？）が大型塔（復元高206cm）である[3]。

第２代奉行である竹村丹後守道清墓（第25図-152.1635年）は、勝源寺境内の石廟内に納められており、一般的な墓所より荘厳化が図られているが、宝篋印塔自体の総高は約125cmである[4]。

温泉津では、西念寺４号窟に所在する伝松浦家墓所の３基の宝篋印塔（第18図1.2.3、２が1613年）が総高170cm前後の大型塔である[5]。

また、日蓮宗恵珎寺の廟式墓所から通路を挟んで北東側古墓集積内に所在する組合せ宝篋印塔（第22図６）は総高235cmを測り、福光石製の宝篋印塔としては知られる限り最大規模のものである。なお、隣接して所在する（第22図６）も推定総高176cmの大型塔（寛永17年・1640）である。恵珎寺塔の造立者は不明であるが、石塔に題目が記されている点から、当初から恵珎寺に存在したものと考えられる[6]。

このように、17世紀前半段階では、支配階級（武士）、山師、有力商人などが同一様式の宝篋印塔を造立していることが知られている。そして、視覚的な階層順位の体現として、上位階層の石塔が大型であり、階層が下がるに従ってサイズダウンしていくことが通則と考えられる。

大安寺跡の推定大久保長安墓塔が造立されたと考えられる1613年前後では、代官墓が墓塔階層の頂点に位置づけられるが、２代目代官竹村丹後守道清墓塔は、中規模のサイズである。

大久保長安治世後（1613年～17世紀後葉）の石見銀山遺跡内では、階層性に基づく石塔造立規範は必ずしも厳密に機能してはいない。石塔のサイズは、造立者の実際の経済力などがより端的に反映されているらしく、当該時期の造墓に対する政治的な規制はやや弛緩したもので、石塔のサイズが政治権力や階層性を忠実に体現しているものではなさそうである。

しかし、18世紀以降の石見銀山奉行墓では、墓標自体も他階層の墓標より大きいうえ、石造基壇や玉垣・灯籠などで荘厳化を図っており、墳墓が階層性をより厳格に明示する段階に移行していることがうかがえる。

いずれにせよ、石銀地区墓Ⅱ・Ⅲの大型墓塔が17世紀前半の石銀地区開発を担った鉱山師の経済力を体現、可視化するものであることは指摘できるであろう[7]。

[参考文献]

1．島根県教育委員会・大田市教育委員会　2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書５　分布調査と是石調査の成果』

2．三瓶古文書を読もう会　1995『石見銀山百か寺』

3．島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書３－安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外―』

4．関根達人　2011「石廟の成立と展開」『日本考古学』第32号　一般社団法人日本考古学協会
竹村丹後守墓は、本格的な越前式石廟を石見銀山内で初めて造営し、その後の銀山内での石廟の展開に大きな影響を与えたことが指摘されている。竹村丹後守墓は、石塔のサイズのみで矮小化した評価をするのではなく、石廟という荘厳化装置の導入を重視する必要がある。

5．島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書７－温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（１）－』

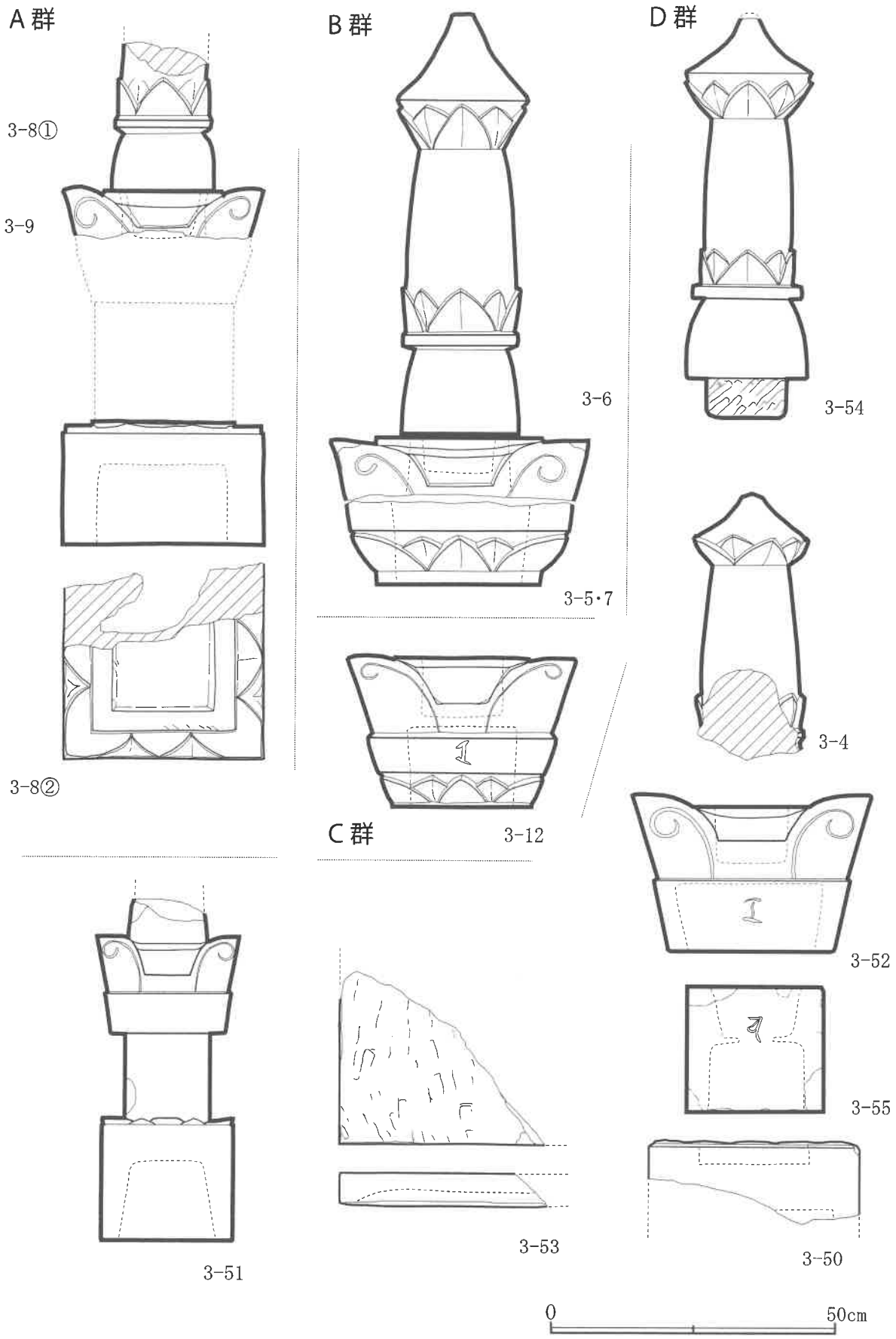
6．島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書６－温泉津地区恵珖寺墓所－』
※報告書文中では、総高236cmと表現されるが、掲載された第22図－６のスケールでは200cm程である。原図を確認したところ総高236cmが正しい。

7．島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11－極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区』

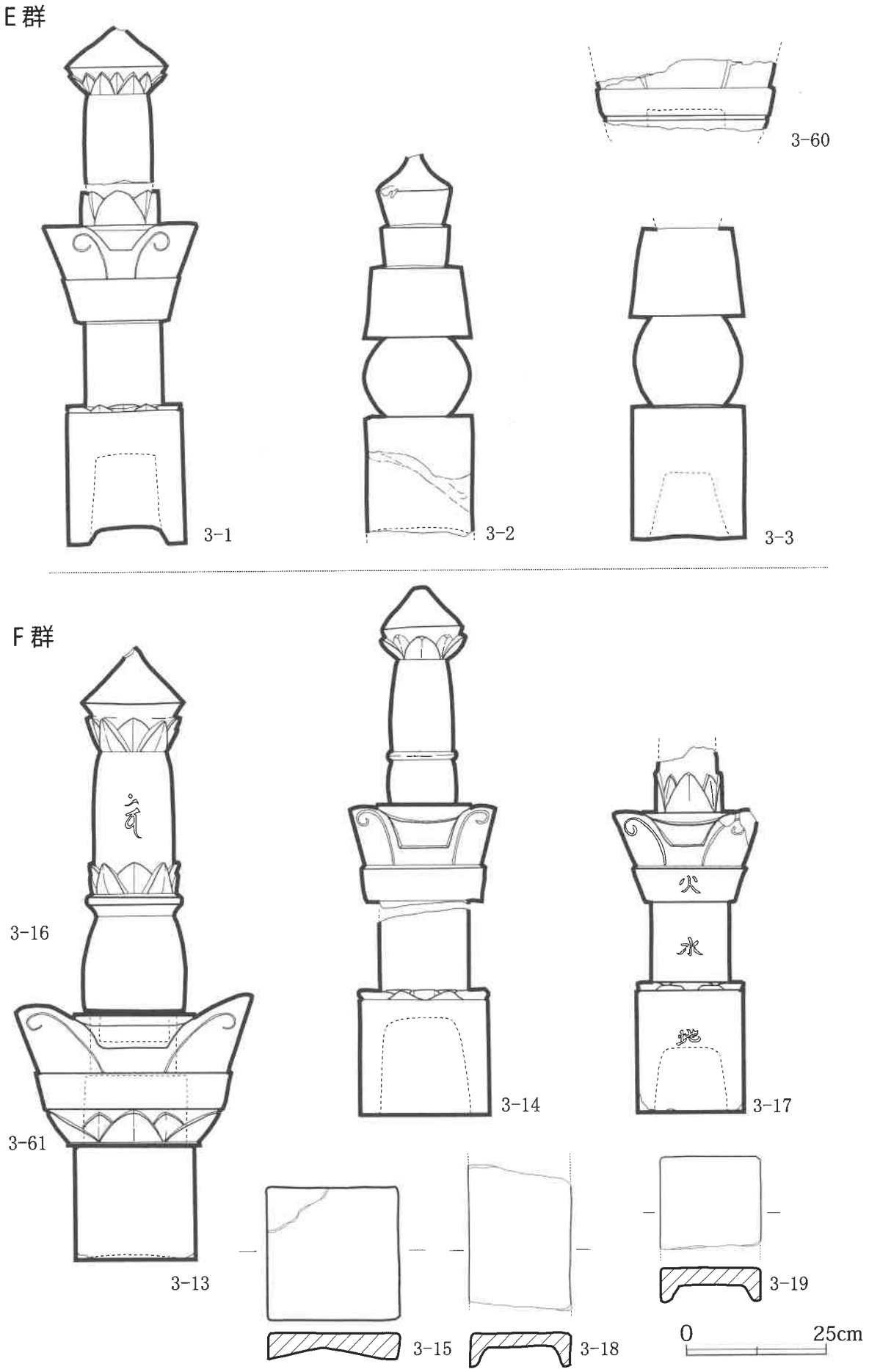
第１表　石見銀山遺跡に所在する組合せ宝篋印塔比較表（17世紀）

	個体（番号）	年代	相輪	笠	塔身	基礎	台座	総高	笠１：相輪比率	笠１：塔身比率	笠１：基礎比率
石銀地区墓Ⅲ	3-64		72.5	28	*22*	*32.2*	8	*163.1*	2.59	—	—
	3-5･6･7		74	25	*20*	*28.8*	*8*	*155.75*	2.96	—	—
	3-16･61		66	23.5	*18.8*	*27.0*	*8*	*143.3*	2.81	—	—
	3-20･62		68.5	27.5	*22*	*31.6*	*8*	*157.6*	2.49	—	—
	3-21		51.5	—	—	—	—	—	—	—	—
	3-22		58	—	—	—	—	—	—	—	—
	3-23･24		64.5	23.5	*18.8*	*27.0*	*8*	*141.8*	2.74	—	—
	3-39		59	—	—	—	—	—	—	—	—
	3-41･37		67	—	—	—	—	—	—	—	—
	3-45･65		63.5	—	—	—	—	—	—	—	—
	3-46･47		58.5	24.5	*19.6*	*28.2*	*8*	*138.8*	2.39	—	—
	3-49		61	—	—	—	—	—	—	—	—
	3-54		64	—	—	—	—	—	—	—	—
	3-57･58		59.5	26	*20.8*	*29.9*	*8*	*144.2*	2.29	—	—
	3-64	元和	*66.5*	28	*22.4*	*32.2*	18	*167.1*	—	—	—
	5-3		66.5	28	*22.4*	*32.2*	*8*	*157.1*	2.38	—	—
	5-4.5.6		82	32	25	*36.8*	*9*	*178*	2.56	0.78	—
	6-2		70	29.5	*23.6*	*33.9*	*8*	*165.0*	2.37	—	—
	9-2.3		*70*	34	*27.2*	*39.1*	*8*	*178.3*	—	—	—
	9-8.9		92.5	36	*28.8*	*41.4*	*10*	*201.5*	2.57	—	—
	9-12.13		70.5	32	*25.6*	*36.8*	*8*	*172.9*	2.20	—	—
	9-10.11		63	—	—	—	—	—	—	—	—
	10-1.3-59		*95*	39.6	*31.7*	38	*10*	*214.3*	—	—	1.04
石銀地区墓Ⅱ	第19図左	1618	82	37	22.5	37.5	9.5	188.5	2.22	0.61	1.01
	第19図右	1621	73	33	*26.4*	*38.0*	*9.5*	*179.9*	2.21	—	—
安原谷安原備中墓	第19図２		47.5	20.5	*16.4*	24.0	—	*108.4*	2.32	—	1.17
	第19図３		53	22.5	*18*	28.5	—	*122.0*	2.36	—	1.27
	第19図４		44.5	19	*15.2*	*21.9*	—	*100.6*	2.34	—	—
大安寺跡推定大久保長安塔	第20図96	1613？	70	39	*36*	*61.0*	—	*206.0*	1.79	—	0
大安寺跡	第17図61		64	25.5	*20.4*	*29.3*	8	*147.2*	2.51	—	—
	第17図60		45	19	*15.2*	*21.9*	—	*101.1*	2.37	—	—
	第17図62		38	21	*16.8*	*24.2*	—	*100.0*	1.81	—	—
	第17図63		48	19.5	*15.6*	*22.4*	—	*105.5*	2.46	—	—
勝源寺竹村丹後守墓塔	第25図152	1635	50	25	21	29	—	125.0	2.00	0.84	1.16
龍昌寺Ｊ区石窟内	第30図299		61.5	26.5	26	36	9.5	159.5	2.32	0.98	1.36
	第30図300		60	28	26	36.5	9	159.5	2.14	0.93	1.30
龍昌寺	第21図136		49	21.5	*17.2*	*24.7*	—	*112.4*	2.28	—	—
	第22図174		46	21	*16.8*	*24.2*	—	*108.0*	2.19	—	—
長楽寺跡	第９図42・44		70	36.5	*29.2*	*42.0*	—	*177.7*	1.92	—	—
妙正寺跡	第18図68		48	20.5	17	*28.0*	—	*113.5*	2.34	—	—
	第18図69		45.5	17	17	24	—	*103.5*	2.68	—	—
仁摩庵寺石塔線		1688	52.5	26.5	21	27	40	166.5	1.98	0.71	1.00
温泉津西念寺伝松浦家墓所	第18図１		61.5	32	24.5	37	10.5	165.5	1.92	0.77	1.16
	第18図２		70.5	33.5	25	40	7.5	176.5	2.10	0.75	1.19
	第18図３		70.5	34.5	25.5	37	—	167.5	2.04	0.74	1.07
温泉津恵珖寺	第22図６		95	50	36	54	—	235	1.90	0.72	1.08
	第22図７		*70*	35	30	41	10	*186*		0.86	1.17
温泉津極楽寺	第７図12		35	16	14.5	22	—	87.5	2.19	0.91	1.38
	第７図13		40	17	15	22.5	—	94.5	2.35	0.88	1.32
	第７図14		45	17.5	*14*	*20.1*	—	*96.6*	2.57	—	—
金剛院1815年塔	第６図７	1815	79.5	29.5	27.5	45	12.5	194	2.69	0.93	1.53

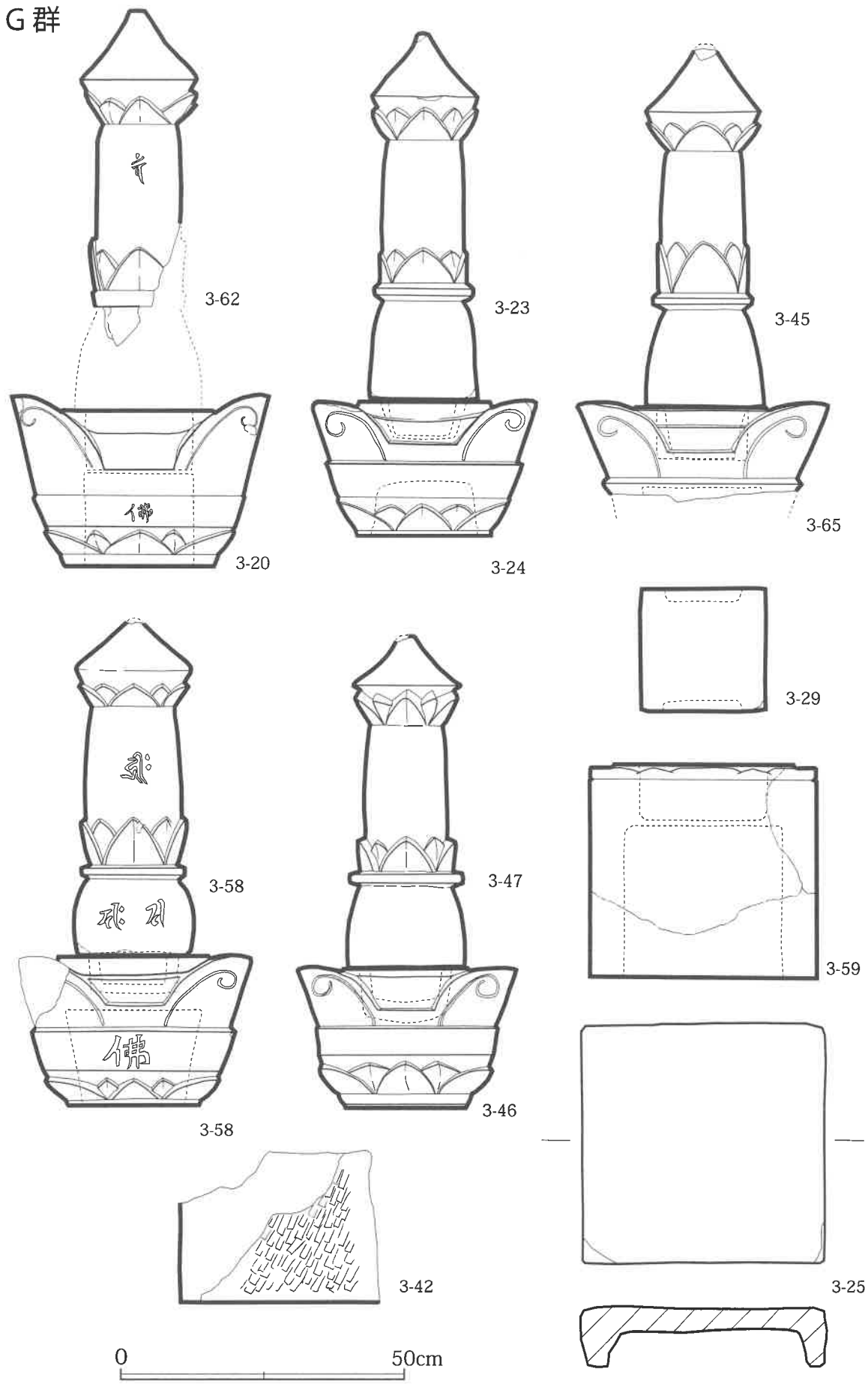
※番号は各報告書の図版番号である。部材の数値は高さを示す。
斜体数字は推定値を示す。塔身の推定値は笠高×0.8、基礎の推定値は笠高×1.15で算出。



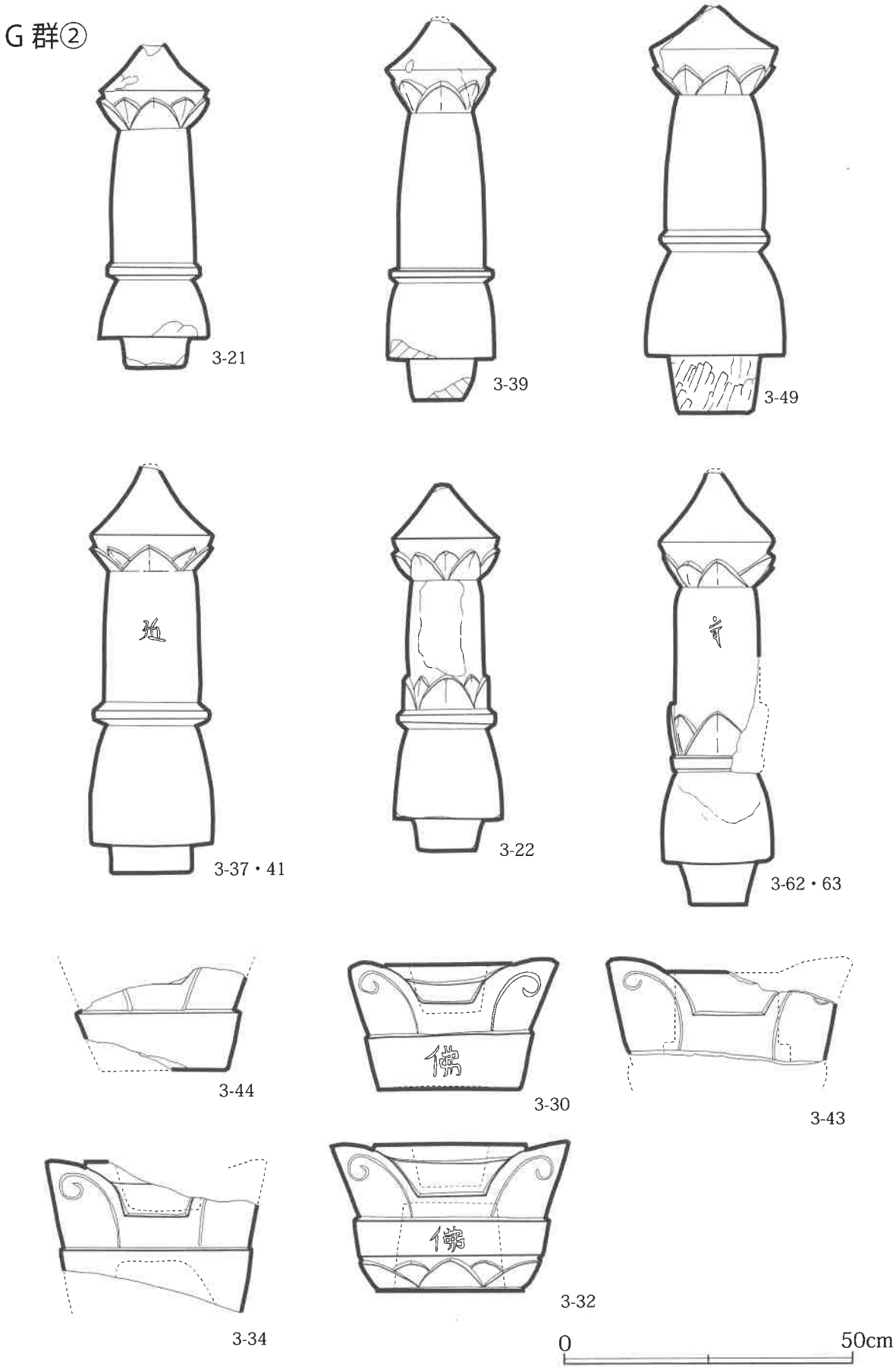
第 6 図　石銀地区墓Ⅲ　3 -ABCD 群石造物実測図　S=1/10



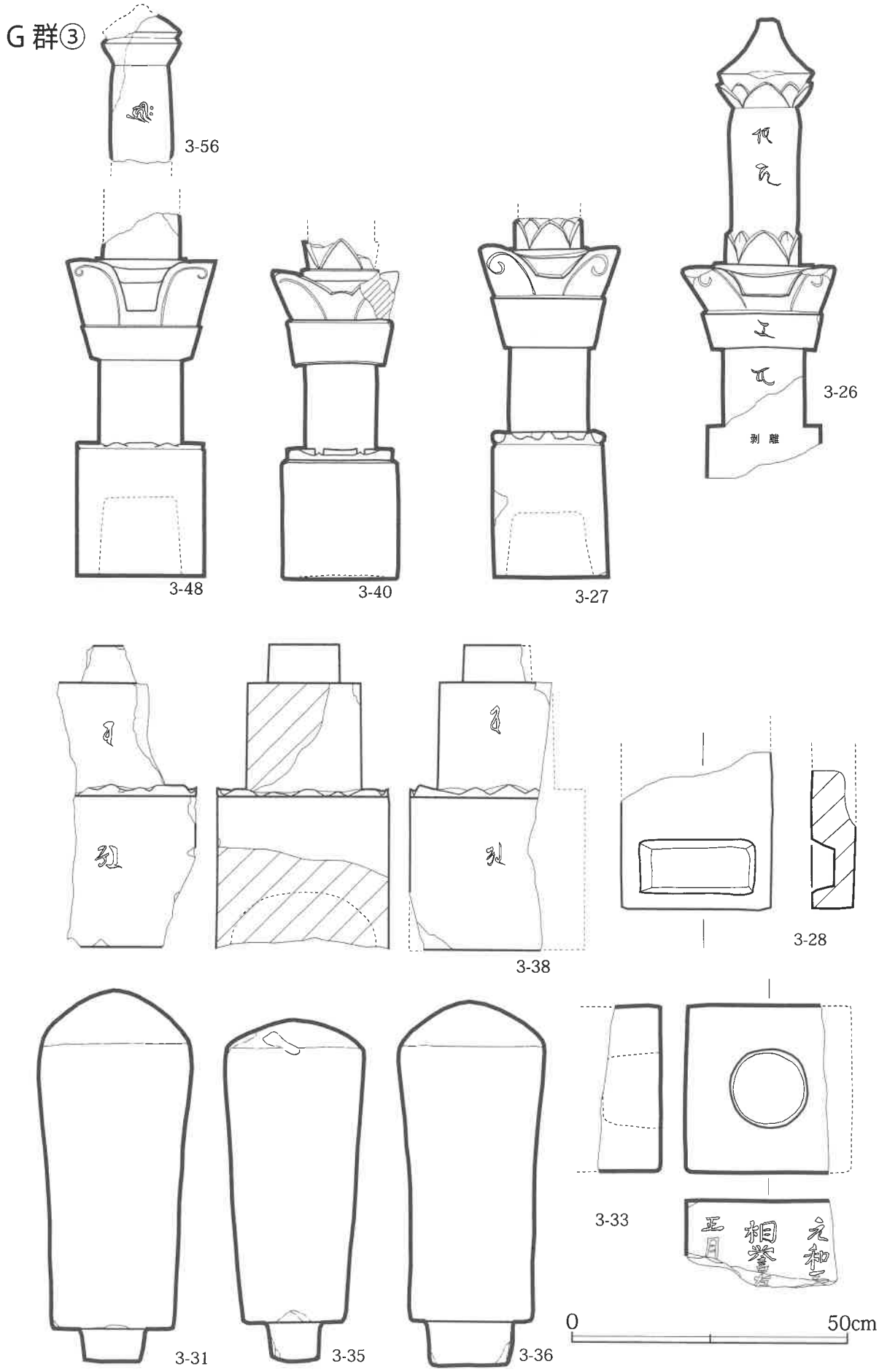
第７図　石銀地区墓Ⅲ　3 -EF 群石造物実測図　S=1/10



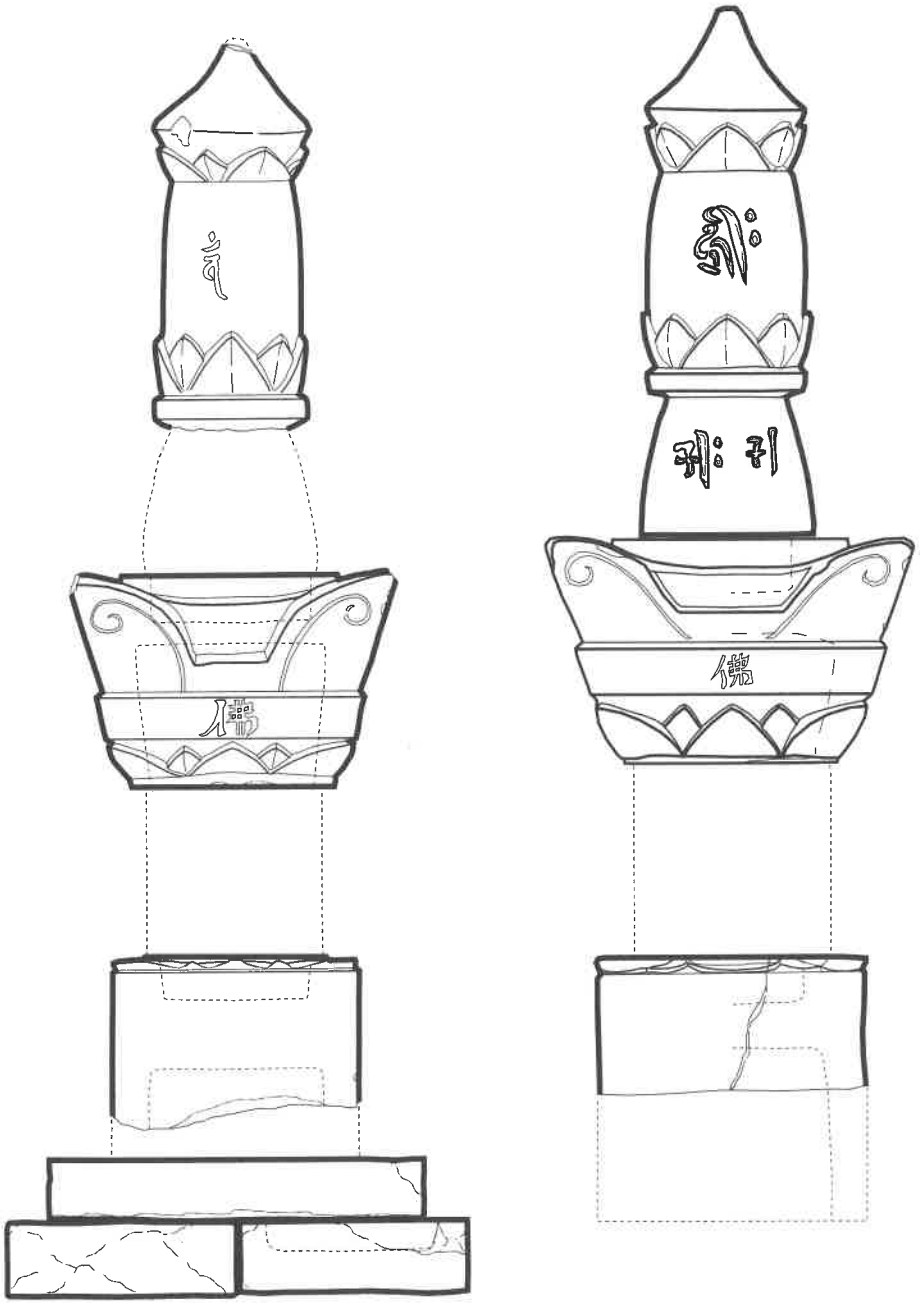
第8図　石銀地区墓Ⅲ　3-G群①石造物実測図　S=1/10



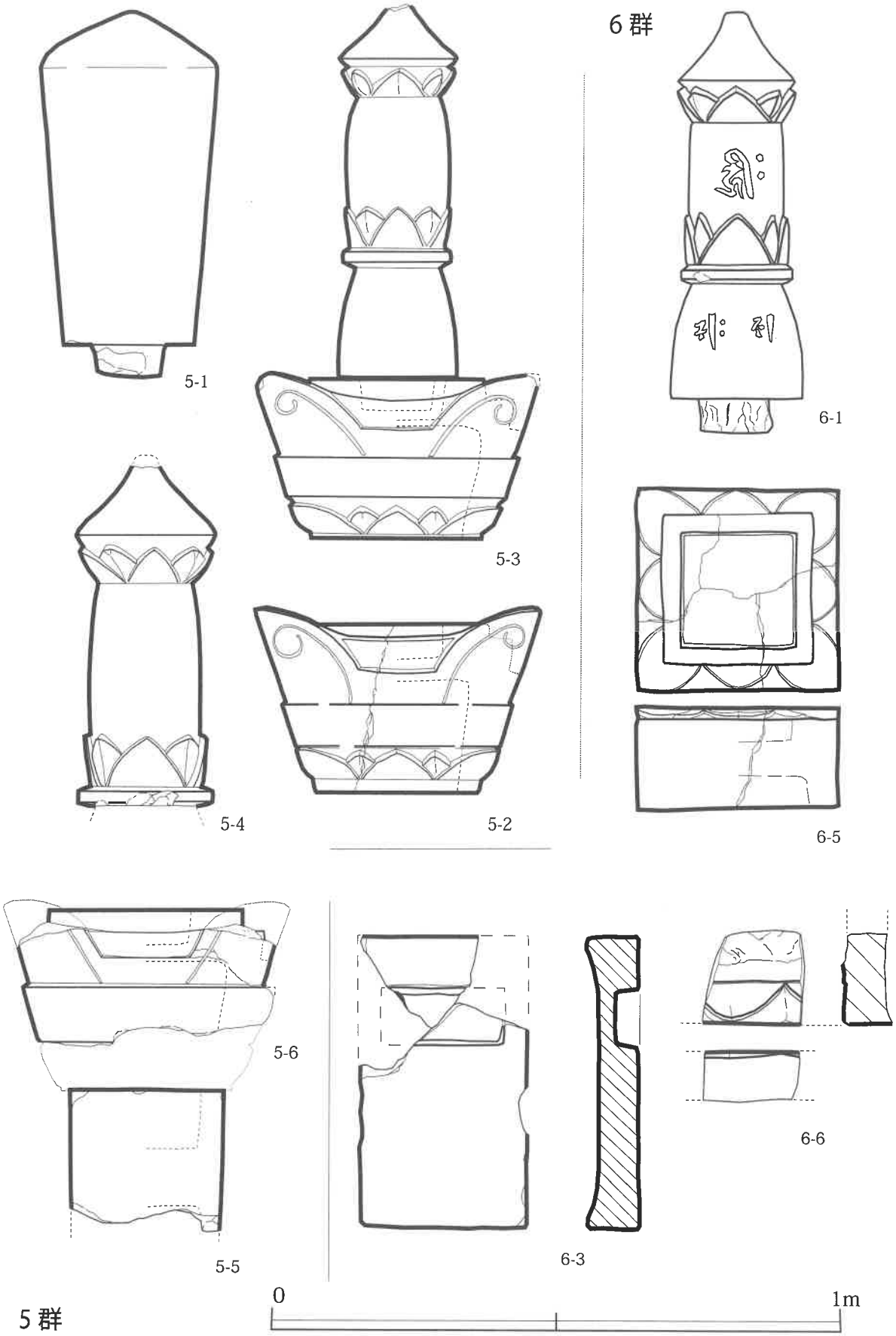
第 9 図　石銀地区墓Ⅲ　3 -G 群②石造物実測図　S=1/10



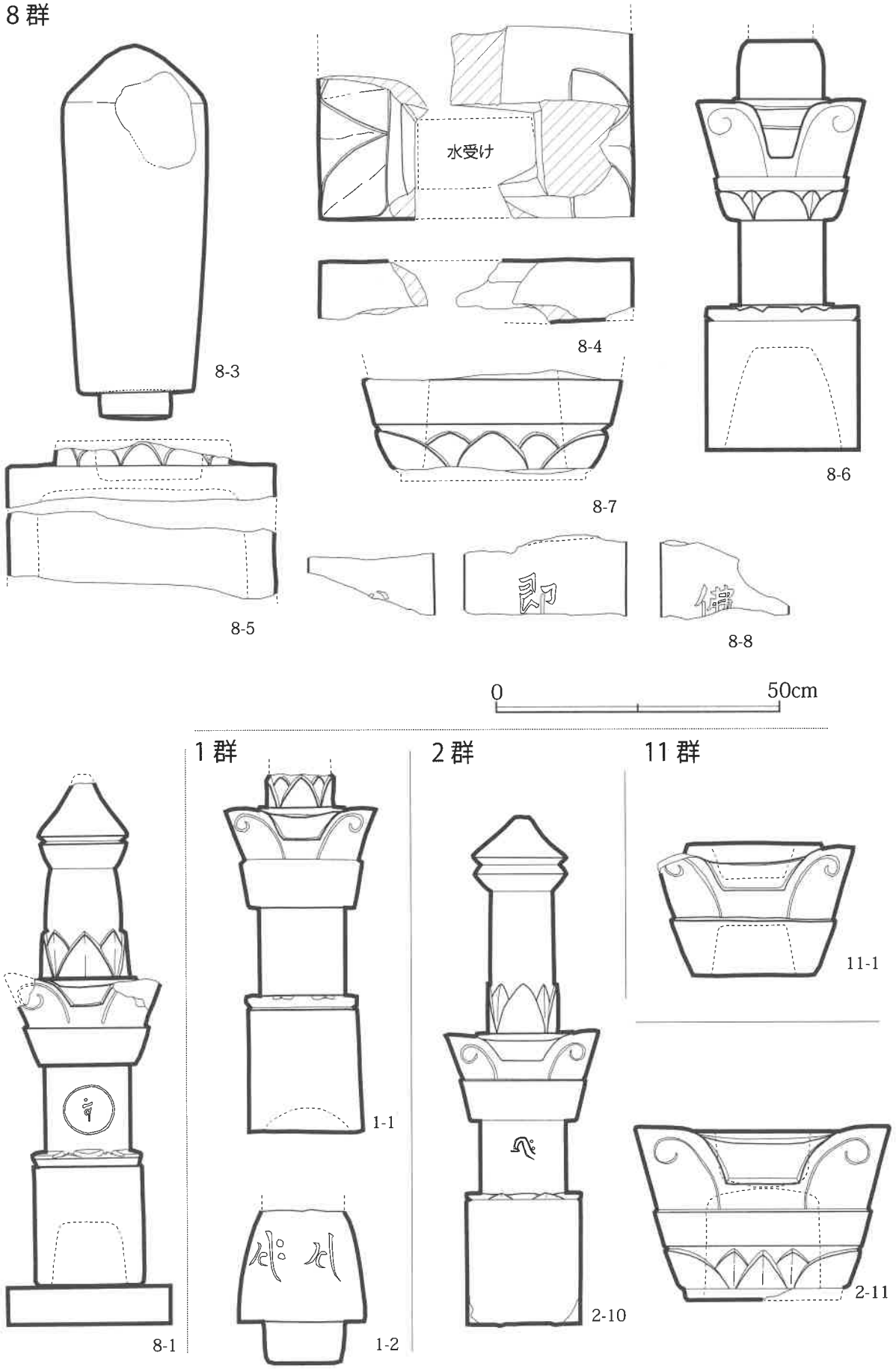
第10図　石銀地区墓Ⅲ　3 -G 群③石造物実測図　S=1/10



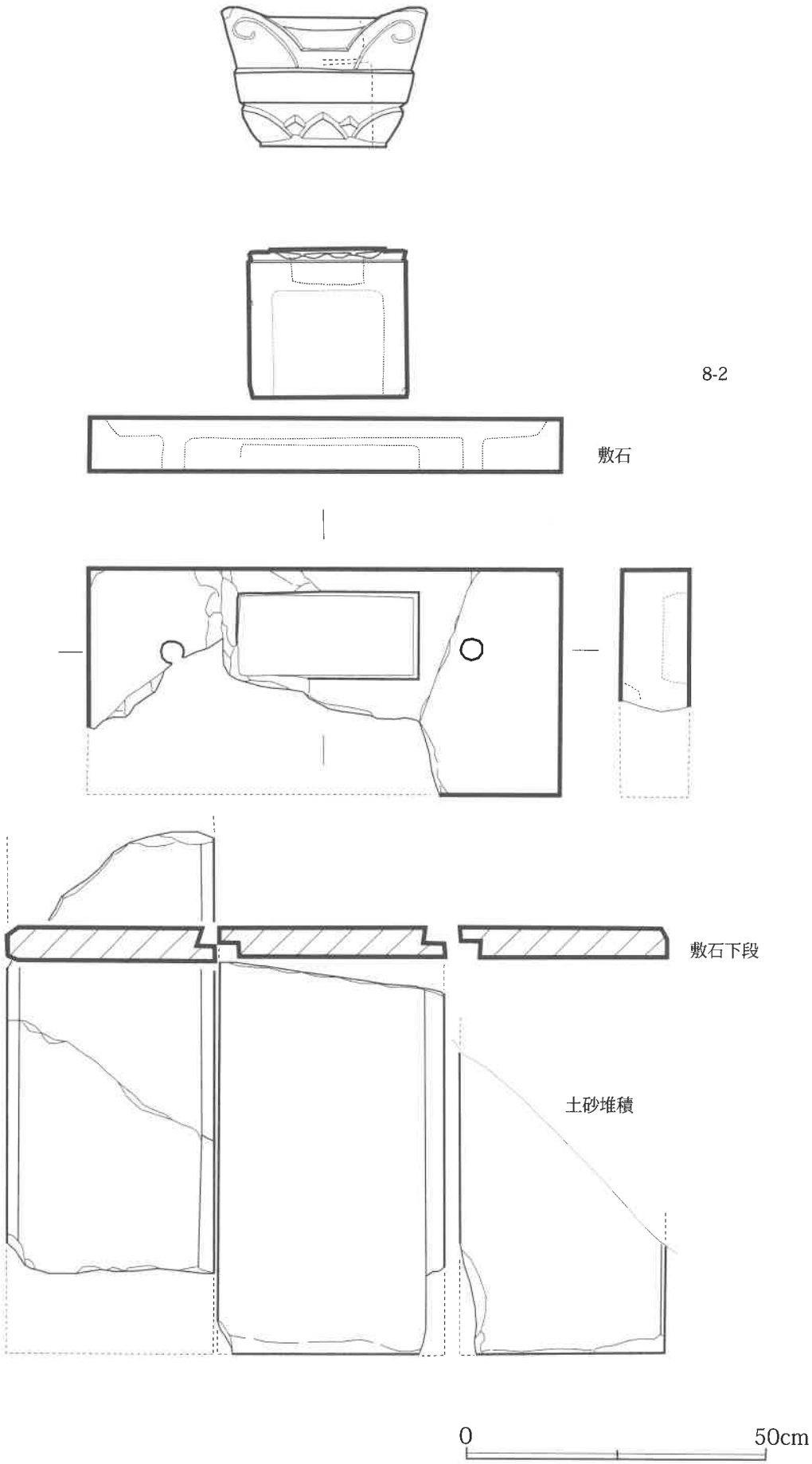
第11図　石銀地区墓Ⅲ　3-H群・6群①石造物実測図　S=1/10



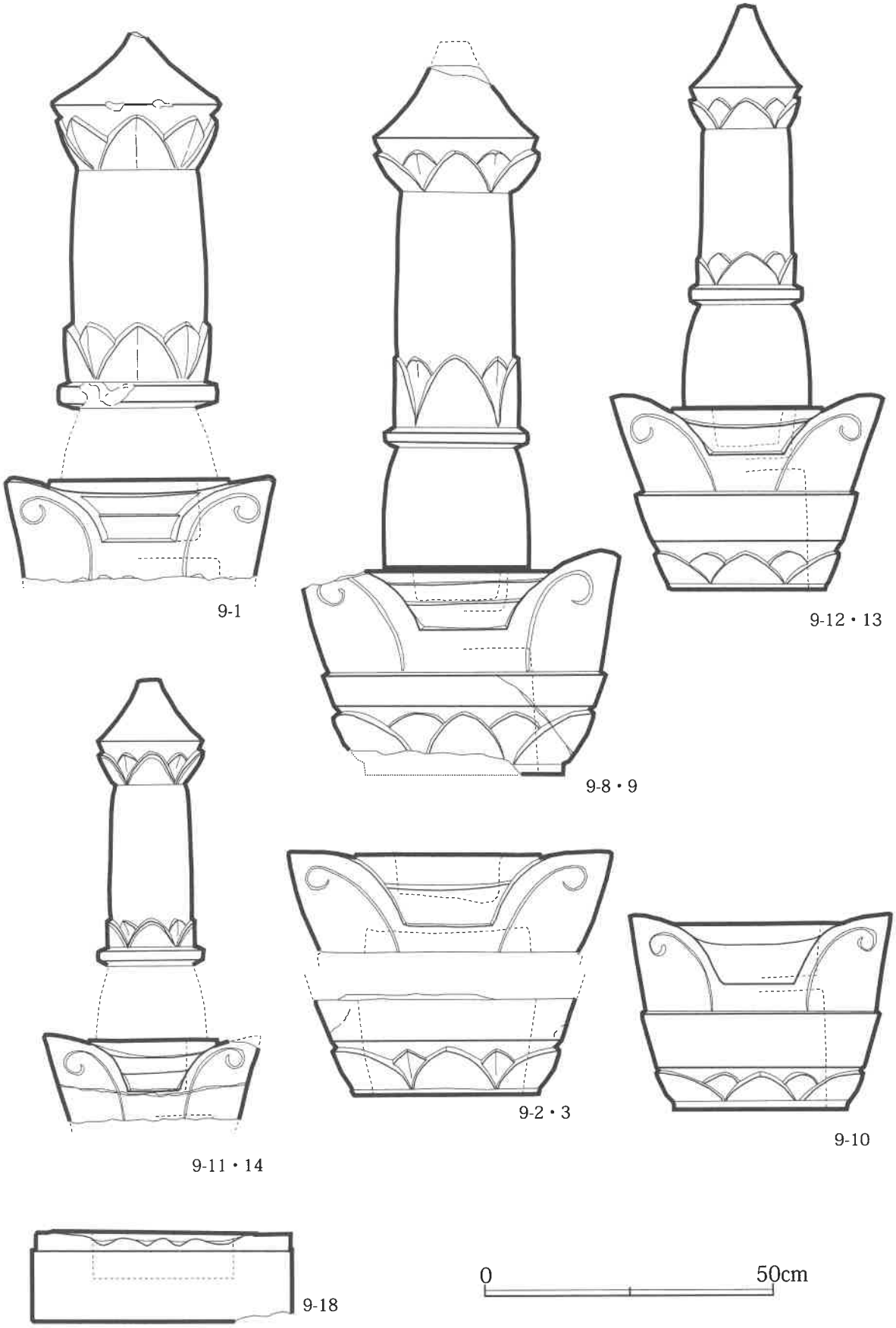
第12図　石銀地区墓Ⅲ　5群・6群②石造物実測図　S=1/10



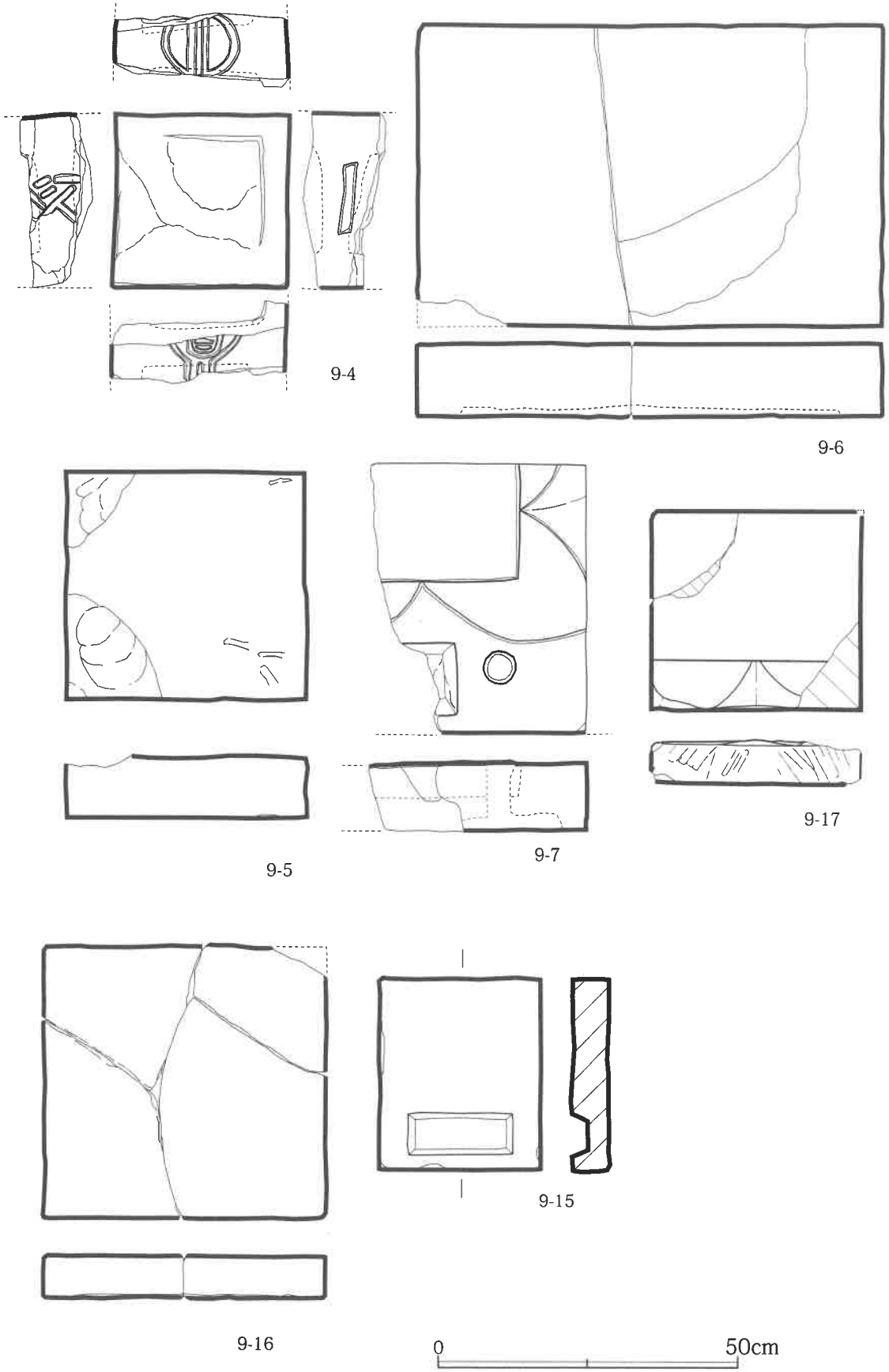
第13図　石銀地区墓Ⅲ　8群①・1群・2群・11群石造物実測図　S=1/10



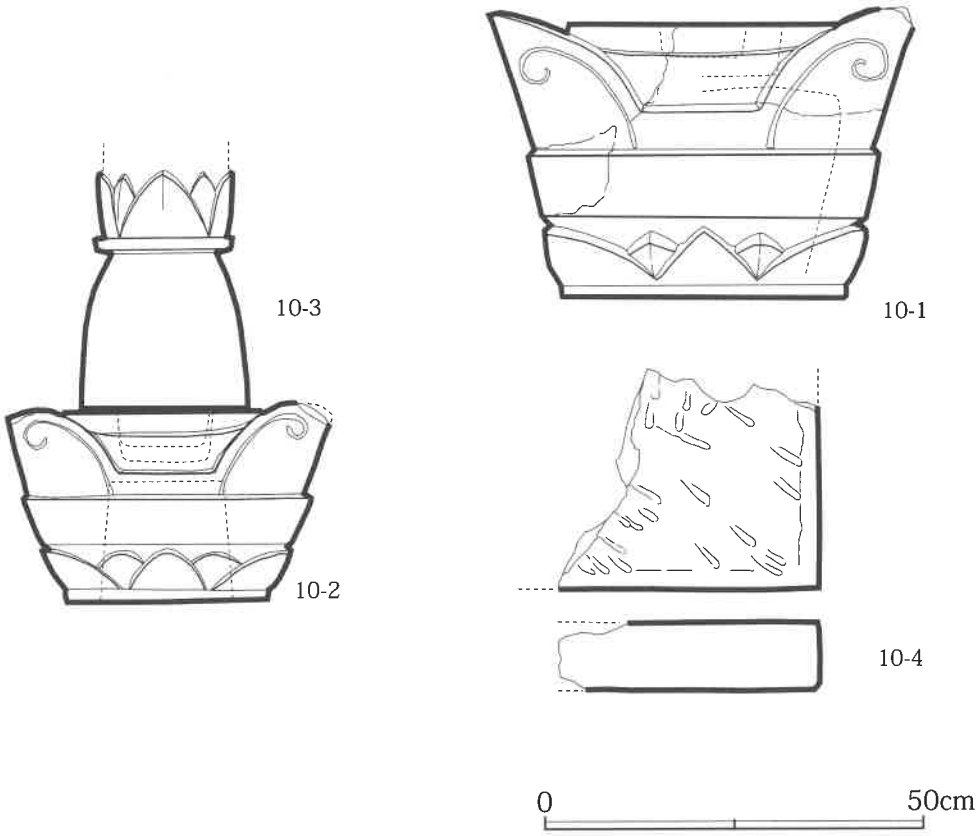
第14図　石銀地区墓Ⅲ　8群②石造物実測図　S=1/10

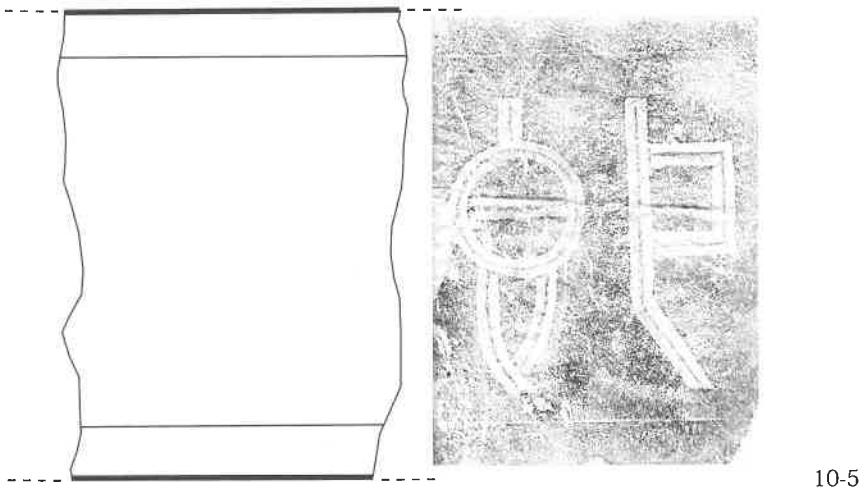


第15図　石銀地区墓Ⅲ　9群①石造物実測図　S=1/10



第16図　石銀地区墓Ⅲ　9群②石造物実測図　S=1/10

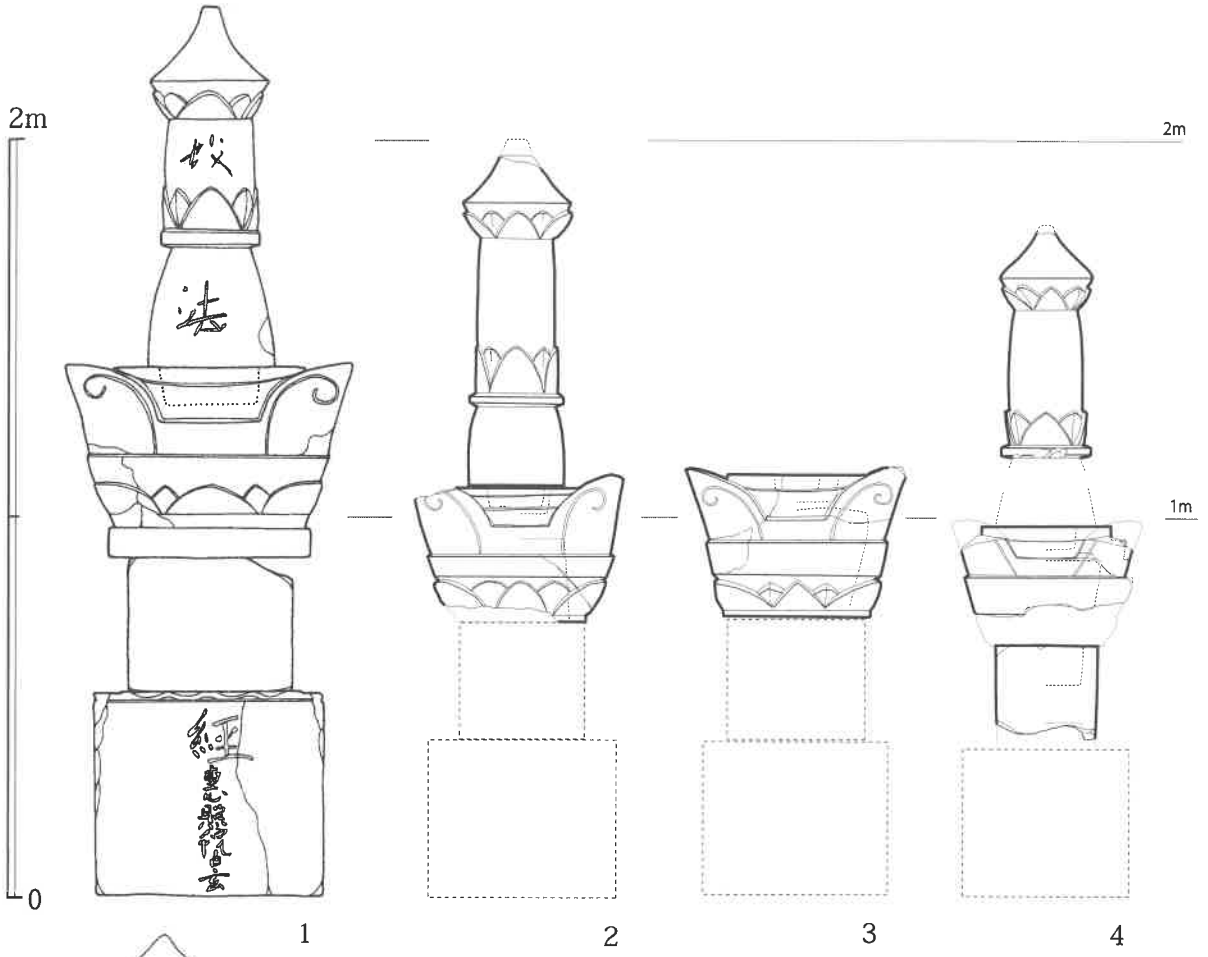




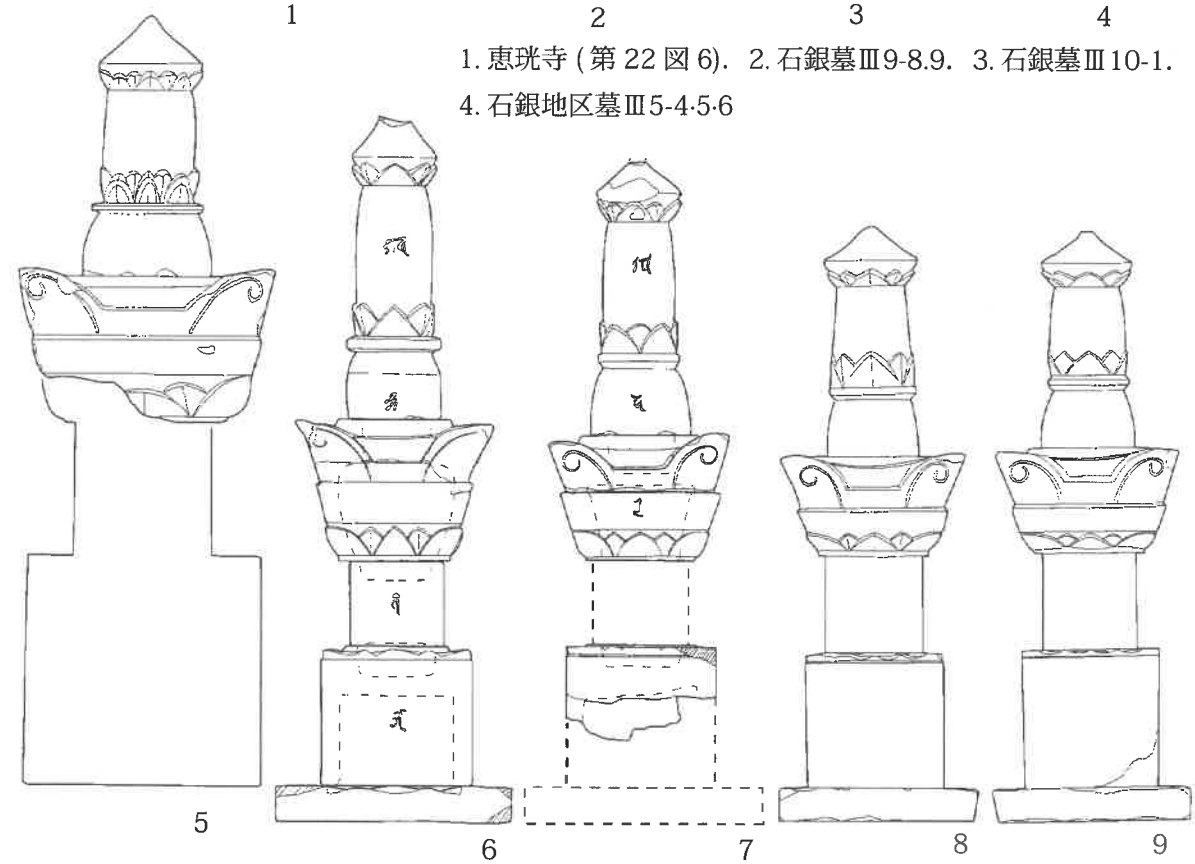
(S=1/5)

0 50cm

第17図　石銀地区墓Ⅲ　10群石造物実測図



1. 恵珙寺 (第 22 図 6). 2. 石銀墓Ⅲ9-8.9. 3. 石銀墓Ⅲ10-1.
4. 石銀地区墓Ⅲ5-4·5·6



5. 大安寺跡・推定大久保長安塔. 6.7. 石銀地区墓Ⅱ.
8.9. 龍昌寺跡 J 区岩窟内

第18図　石見銀山遺跡の大型組合せ宝篋印塔比較図（17世紀）　S=1/20

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第13図	11－1		組合宝篋印塔	23.5	35.0		笠部のみ。幅広の軒を持ち請花を施さない。		石銀Ⅲ
第17図	10－5	279	板石（組合宝篋印塔）	31.0	(20.0)		10－1と同じ基壇内に所在。篆書体で「即」の文字が二重線で刻書される。文字の大きさは、タテ19・7cm、ヨコ19・2cm。8－8のような塔身の一面の可能性がある。		石銀Ⅲ
第17図	10－4	279	台石	9.0	(34.5)		表面に丁寧な加工痕を残す。10－1と同じ基壇内に所在。		石銀Ⅲ
第17図	10－3	279	組合宝篋印塔	26.0	42.5		笠部のみ。幅広の軒下の下には請花を施す。		石銀Ⅲ
第17図	10－2	279	組合宝篋印塔	(36.2)	22.0		相輪部のみ。伏鉢の上部に突帯＋請花を施す。九輪は埋没しており不明		石銀Ⅲ
第17図	10－1	279	組合宝篋印塔	39.6	59.0		大型の笠部のみ。一辺140cm程度の基壇を持つ。		石銀Ⅲ
第15図	9－18		反花付基礎	(15.5)	45.0		9－5の隣で埋没していたもの。基壇内にある。		石銀Ⅲ
第16図	9－17	268	反花付台石	7.2	35.0		短辺は33・0cm。蓮弁2枚を表現することから、台座全体は6枚程度で構成する。		石銀Ⅲ
第16図	9－16.	261	台石	7.0	47.0		短辺は45・5cmの正方形に近い台座。		石銀Ⅲ

凡　例

・石見銀山遺跡仙ノ山石銀地区墓Ⅲに所在する石造物の観察表である。

・各石造物の規模は、基本的に全高及び最大幅をcm単位で掲載した。欠損している場合は、残存している規模を残存高または各部材ごとの高さで（）をつけて掲載した。

・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は、〔〕で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は、〕（上欠）、〔（下欠）と示した。また、推定できる文字は□内に入れて表示した。

戒名及び名字は○○○とした。

・石造物の実測台帳は保管している。

・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第16図	9－6	273	台石	12.2	78.5		9－5背後の一段高所の基壇上にある。奥行きは約50・0cmである。		石銀Ⅲ
第16図	9－5		台石	10.0	40.0		1辺120cm程度の基壇上にある。前面に加工痕を留める。		石銀Ⅲ
第16図	9－4	275	組合宝篋印塔	(13.8)	29.0		四面に篆書体の一字銘を持つ塔身。文字は「斎」のみ判読できる。		石銀Ⅲ
第15図	9－2・3	265	組合宝篋印塔	34.3	56.0		大型の笠部。軒下に請花を施す。		石銀Ⅲ
第15図	9－1－2	257	組合宝篋印塔	(18.0)	46.5		軒下を欠損する大型の笠部。		石銀Ⅲ
第15図	9－1－1	278	組合宝篋印塔	(65.6)	29.0		伏鉢が欠損する相輪部。伏鉢上に突帯＋請花を廻らせ、宝珠下に請花を施す。		石銀Ⅲ
第13図	8－8	277	組合宝篋印塔	(14.0)	28.5		塔身の四面に「佛」「即」「〇」の銘あり。		石銀Ⅲ
第13図	8－7		組合宝篋印塔	(18.0)	(45.5)		笠部の軒下のみ残存。軒下に請花を施す。		石銀Ⅲ
第13図	8－6	256	一石宝篋印塔	(72.4)	30.0	寛永二年　信 〇念譽宗清　女 四月十六日	相輪は伏鉢までが遺存。笠の軒下に請花を施す。基礎に「キリーク」の銘あり。	1625	石銀Ⅲ
第13図	8－5.	257	無縫塔	(23.6)	47.0		請花付台座の一部のみ。		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第16図	9－15	262	台石	6.0	32.0		27・0cmの前面に水入れを持つ板石。小型の宝篋印塔の台石か。		石銀Ⅲ
第15図	9－14	272	組合宝篋印塔	(63.0)	19.0		相輪部のみ。伏鉢の上部に突帯＋請花を施し、宝珠下には請花を施す。平成10年度調査時より基礎の欠損が拡大		石銀Ⅲ
第15図	9－13	271	組合宝篋印塔	77.8	22.0		相輪部のみ。伏鉢の上部に突帯＋請花を施し、宝珠下には請花を施す。		石銀Ⅲ
第15図	9－12	266	組合宝篋印塔	34.2	47.0		笠部のみ。幅広の軒下の下には請花を施す。		石銀Ⅲ
第15図	9－11	267	組合宝篋印塔	(15.0)	37.5		笠部のみ。平成10年度調査時には完形であったが今回は軒上のみ遺存		石銀Ⅲ
第15図	9－10	263	組合宝篋印塔	34.0	45.0		笠部のみ。幅広の軒下に請花を施す。		石銀Ⅲ
第15図	9－9	269	組合宝篋印塔	39.0	55.0		笠部のみ。大型品で軒下に請花を施す。		石銀Ⅲ
第15図	9－8	270	組合宝篋印塔	(97.5)	28.0		相輪部のみ。伏鉢の上部に突帯＋請花を施し、宝珠下には請花を施す。		石銀Ⅲ
第16図	9－7.	274	反花付台石	(23.6)	45.0		反花付き台石の一部。前面に水入れと花立ての孔を作り出している。本来は4石で構成すると考えられ、奥行き75cmの大きさが考えられる。		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第12図	6－5	243	組合宝篋印塔	17.5	30.6		反花付台座のみ、上下に刳り込みを持つ。平成10年度調査では、「厳」「十月」などの銘が確認されている		石銀Ⅲ
第12図	6－3	254	板石	9.0	51.2		水受けの刳り込みを持つ		石銀Ⅲ
第11図	6－2－2	243	組合宝篋印塔	29.5	48.5		笠部のみ。大型で軒に「佛」を刻字する。軒下に請花を表す。6－5と同一個体		石銀Ⅲ
第11図	6－2－1	243	組合宝篋印塔	76.0	22.8		相輪部のみ。伏鉢上に突帯＋請花を設け、宝珠下に請花を廻らせる。九輪に「キリーク」、伏鉢に「サ」「サク」を刻字する。6－5と同一個体		石銀Ⅲ
第12図	6－1		組合宝篋印塔	74.0	23.0		相輪部のみ。伏鉢上に突帯＋請花を設け、宝珠下に請花を廻らせる。九輪に「キリーク」、伏鉢に「サ」「サク」を刻字する。基壇あり。		石銀Ⅲ
第12図	5－6	246	組合宝篋印塔	(復元値33.5)	50.0		笠部のみ。大型で上下に刳り込みを持つ。		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第13図	8－4	258	組合宝篋印塔	(10.8)	55.2		反花付台座の上部。2片に分かれている。		石銀Ⅲ
第13図	8－3	257	無縫塔	66.2	25.5		塔身の高さは61・5cm。塔身側面はあまりカーブせずに立ち上がる。		石銀Ⅲ
第14図	8－2－4	255	組合宝篋印塔	4.8	71.0		板状の基礎石を3枚組み合わせる。中央のものは幅37・5cm、左右のもの幅34・5cm。それぞれの継ぎ手は印籠状に加工され組み合わせることができる。		石銀Ⅲ
第14図	8－2－3	255	組合宝篋印塔	8.8	77.8		板状の基礎石。長さ77・8cm、幅37・6cm、厚さ8・8cm。中央前方に水入れの窪みを持ち、その両側に花入れの貫通坑を施している。		石銀Ⅲ
第14図	8－2－1	255	組合宝篋印塔	24.8	26.0	萬治二年乙未天 地 ○覚恵正信士 四月十四日	反花付台座。上下から刳り込みが入る。	1659	石銀Ⅲ
	8－1	259・260	一石宝篋印塔	(89.0)	(27.0)	承應四年乙未天 ○霊譽妙善尼 三月八日	別石の基礎が附属。基礎は長さ40・5cm、幅28・5cm、厚さ6・8cmで水受けの刳り込みがある。塔身の日輪内に「バン」の刻字	1655	石銀Ⅲ
第12図	6－6.		組合宝篋印塔	(8.8)	(11.2)		反花付台座の一部のみ。		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第11図	3－64－1	245	組合宝篋印塔	(55.5)	22.2		相輪上半部のみ。九輪に梵字「バン」「キリーク」を表す。伏鉢は欠損するが突帯上に請花を施し、宝珠下に請花を廻らす。		石銀Ⅲ
第8・9図	3－62・63	209	組合宝篋印塔	75.6	20.0		相輪部のみ。九輪に梵字「バン」を表す。伏鉢上に突帯＋請花を施し、宝珠下に請花を廻らす。		石銀Ⅲ
第7図	3－61	181	組合宝篋印塔	27.0	42.5		笠部のみ。軒に「佛」の銘あり		石銀Ⅲ
第7図	3－60		組合宝篋印塔	(13.0)	(32.0)		笠部のみ。軒下に請花を持つ		石銀Ⅲ
第8図	3－59		組合宝篋印塔	38.0	40.0		反花付台座のみ。内側は上面ほぞ穴が深さ9・5cm程刳り込まれ、下面側からも27・5cm程刳り込まれる。壁厚は6cm程度。		石銀Ⅲ
第8図	3－58	241	組合宝篋印塔	(64.2)	21.0		相輪部のみ。九輪に梵字「キリーク」、伏鉢に「サ」「サク」を表す。伏鉢上に突帯＋請花を施し、宝珠下に請花を廻らす。		石銀Ⅲ
第8図	3－57	216	組合宝篋印塔	26.4	41.0		笠部のみ。軒に「佛」の銘があり、軒下に請花を持つ。		石銀Ⅲ
第10図	3－56	228	一石宝篋印塔	(26.5)	14.0		相輪上半部のみ。九輪に梵字「キリーク」を表す。宝珠下の請花は省略されて、二重算盤玉状になる。		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第12図	5－5.	247	組合宝篋印塔	(25.0)	27.0		塔身部のみ。上下に刳り込みを持つ。		石銀Ⅲ
第12図	5－4	252	組合宝篋印塔	(59.5)	24.5		相輪部のみで伏鉢は欠損。伏鉢上に突帯＋請花を設け、宝珠下に請花を廻らせる。		石銀Ⅲ
第12図	5－3－2	250	組合宝篋印塔	(70.0)	20.6		相輪部のみ。伏鉢上に突帯＋請花を設け、宝珠下に請花を廻らせる。		石銀Ⅲ
第12図	5－3－1	248	組合宝篋印塔	29.0	49.0		笠部のみ。軒下に施された請花は間弁に立体感がある。		石銀Ⅲ
第12図	5－2	254	組合宝篋印塔	32.6	50.0		笠部のみ。軒下に請花を施す。		石銀Ⅲ
第12図	5－1	253	無縫塔	64.5	30.6		塔身のみ。平成10年度の調査では基礎もあり		石銀Ⅲ
第8図	3－65		組合宝篋印塔	(17.0)	44.2		笠部のみ。軒下部は欠損。		石銀Ⅲ
第11図	3－64－3	184・202	組合宝篋印塔	28.0	43.5		笠部と基礎板石のみ。笠軒部には「佛」の刻字あり。軒下に請花を表す。板石は長さ91cm、幅30cm、厚さ9・5cmのもの2枚を併置し、その上に48・5cm角、厚さ7・5cmの板石を置いて基礎とする。		石銀Ⅲ
第11図	3－64－2	244	組合宝篋印塔	(22.8)	32.4	元和□ 心誉□ 二月□	反花付基礎のみ。上下部に刳り込みあり。	1615－1624	石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第9図	3－39		組合宝篋印塔	66.0	19.5		相輪部のみ。伏鉢上に突帯を設け、宝珠下に請花を廻らす。		石銀Ⅲ
第10図	3－40	172	一石宝篋印塔	61.2	23.0		相輪上部は欠損。笠部軒下には請花なし、伏鉢表現はなく請花を廻らせる。軒に「ラ」、塔身に「バ」、基礎に「ア」の銘がある		石銀Ⅲ
第8図	3－42		板石	4.5	35.0		上面は丁寧なノミ痕。下面は斜行する粗いノミ痕が残る。基壇上（110×100cm）に所在する		石銀Ⅲ
第9図	3－43		組合宝篋印塔	(18.0)	(41.0)		笠部のみ。軒より下は欠損		石銀Ⅲ
第9図	3－44		組合宝篋印塔	(17.6)	(29.0)		笠部のみ。軒下にほぞ穴なし。		石銀Ⅲ
第8図	3－45	237	組合宝篋印塔	(72.6)	21.0		相輪部のみ。九輪に梵字「バ」、伏鉢に「カ」を表す。伏鉢上に突帯＋請花を設け、宝珠下に請花を廻らす。		石銀Ⅲ
第8図	3－46	233	組合宝篋印塔	24.4	38.0		笠部のみ。		石銀Ⅲ
第8図	3－47	232	組合宝篋印塔	65.5	20.4		相輪部のみ。伏鉢上に突帯＋請花を設け、宝珠下に請花を廻らす。		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第10図	3－48	234	一石宝篋印塔	(66.0)	27.0	慶長二年 妙西信女 五月十日	相輪上半部は欠損。笠軒部に梵字「ラ」、塔身に「バ」、基礎に「ア」を表す。基礎の反花は平坦。	1597	石銀Ⅲ
第9図	3－49	223	組合宝篋印塔	71.2	24.0		相輪部のみ。伏鉢の上部に反花を伴わない突帯が廻り、宝珠下には請花が廻る。九輪に「無」、伏鉢に「量」の銘がある。ほぞには粗い鑿痕が残る		石銀Ⅲ
第6図	3－50	194	組合宝篋印塔	14.8	37.0		反花付基礎のみ。幅19cm、深さ3・6cmのほぞ穴がある。		石銀Ⅲ
第6図	3－51	191	一石宝篋印塔	(60.2)	25.0	慶長四年 妙壽信女霊位 十二月廿日	相輪の上半部は欠損。笠軒下に請花なし。伏鉢に梵字「カ」、軒に「ラ」、塔身に「バ」、基礎に「ア」を表す	1599	石銀Ⅲ
第6図	3－52	192	組合宝篋印塔	27.5	42.0		笠部のみ。軒に梵字「ラ」を表す		石銀Ⅲ
第6図	3－53	197	板石	6.0	(36.0)		下面は、粗く掘り窪める。		石銀Ⅲ
第6図	3－54	198	組合宝篋印塔	(70.2)	22.0		相輪部のみ。伏鉢上に突帯＋請花を設け、宝珠下に請花を廻らす。		石銀Ⅲ
	3－55	196	組合宝篋印塔	22.0	24.0		塔身のみ。一面に梵字「バ」を表す。上下のほぞ穴が深く、壁厚は3・5cm程度。		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第10図	3－27	214	一石宝篋印塔	(65.0)	25.0				石銀Ⅲ
第10図	3－26	227	一石宝篋印塔	(83.6)	28.0		基礎の大半は欠損。相輪に「キャ・カ」、笠に「ラ」、塔身に「バ」の銘がある。伏鉢に請花が表現され、宝珠下に請花が廻る。		石銀Ⅲ
第8図	3－25	203	板石	10.0	43.0		底部裏面は深さ6・4cm余り刳り込まれている		石銀Ⅲ
第8図	3－24	250	組合宝篋印塔	70.6	19.0		相輪部のみ。伏鉢上には突帯＋請花があり、宝珠下には請花が廻る。		石銀Ⅲ
第8図	3－23		組合宝篋印塔	24.0	39.0		笠部のみ。		石銀Ⅲ
第9図	3－22	207	組合宝篋印塔	64.0	19.0		相輪部のみ。九輪に梵字「バン」「キリーク」、伏鉢に「サ」「サク」あり。伏鉢上に突帯＋請花を表し、宝珠下に請花が廻る		石銀Ⅲ
第9図	3－21	208	組合宝篋印塔	(56.4)	19.0		相輪部のみ。伏鉢上は突帯のみで、宝珠下には請花が廻る。		石銀Ⅲ
第8図	3－20		組合宝篋印塔	30.0	45.0		笠部のみ。軒に「佛」の銘あり。3－62と同一個体か。		石銀Ⅲ
第7図	3－19		板石	12.0	36.0		底部裏面は深さ3cm余り刳り込まれている		石銀Ⅲ
第7図	3－18		板石	12.0	(52.0)		底部裏面は深さ3・5cm余り刳り込まれている		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第10図	3－38		三石宝篋印塔	54.8	31.2	慶長二〇〇月〇	基礎と塔身を一石で製作。塔身両側面に「バ」、基礎両側面に「ア」の銘。塔身上にほぞの突起あり。	1597／1615	石銀Ⅲ
第9図	3－37・41	201	組合宝篋印塔	(67.2)	21.0		相輪部のみ。伏鉢下半は欠損。伏鉢上に突帯を設け、宝珠下に請花を廻らす。九輪に「ア」の銘あり		石銀Ⅲ
第10図	3－36	219	無縫塔	66.3	26.2		塔身のみ。本体の高さは58・2cm。側面はやや内反り。		石銀Ⅲ
第10図	3－35	218	無縫塔	62.2	25.0		塔身のみ。本体の高さは55・2cm。側面は直線的。		石銀Ⅲ
第9図	3－34	240	組合宝篋印塔	(26.5)	38.0		笠部のみ。軒に「火」の銘あり。		石銀Ⅲ
第10図	3－33	213	無縫塔基礎	(11.0)	30.0	元和三〇 相譽〇〇 五月〇	基礎のみ。3－31か3－35と組む。	1617	石銀Ⅲ
第9図	3－32	222	組合宝篋印塔	25.8	41.2		笠部のみ。軒に「佛」の銘あり。		石銀Ⅲ
第10図	3－31	217	無縫塔	67.6	27.0		塔身のみ。本体の高さは61・6cm。側面はやや内反り。		石銀Ⅲ
第9図	3－30	226	組合宝篋印塔	22.5	36.5		笠部のみ。軒に「佛」の銘あり。軒下に請花なし。		石銀Ⅲ
第8図	3－29	221	組合宝篋印塔	21.8	22.2		塔身のみ。上下ともに深さ2cm程度のホゾ穴あり。		石銀Ⅲ
第10図	3－28		板石	7.0	(28.5)		長さ20・5×9・5cm、深さ4cmの刳り込みあり。		石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第6図	3－8②	176	組合宝篋印塔	(34.5)	18.0		相輪下半部のみ。伏鉢の上に突帯＋請花を表す		石銀Ⅲ
第6図	3－8①	177	組合宝篋印塔	21.5	35.0		反花付の基礎。基礎3－9と同一の基壇上（180×150cm）に所在する		石銀Ⅲ
第6図	3－6・7	173	組合宝篋印塔	25.0	45.0		笠部のみ。110×75cm程度の基壇上にある		石銀Ⅲ
第6図	3－5	193	組合宝篋印塔	80.6	22.8		相輪部のみ。伏鉢上に突帯＋請花がある。宝珠下には請花が廻る。110×60cm程度の基壇上にある。		石銀Ⅲ
第6図	3－4	245	組合宝篋印塔	(47.0)	20.0		相輪の上半部。九輪に梵字「キャ」、「キリーク」あり。伏鉢上に突帯＋請花を施す。		石銀Ⅲ
第7図	3－3	190	一石五輪塔	(55.6)	20.0		空風輪が欠損		石銀Ⅲ
第7図	3－2	185	一石五輪塔	70.2	19.0	慶長○○ 道○○	空・風・火・水・地の銘		石銀Ⅲ
第7図	3－1	187・188	一石宝篋印塔	(93.2)	28.0	寛永□九年 □□道永童 位 申 九月二十日 昊	相輪部は折れている。伏鉢部に請花が廻り、宝珠下にも請花がある。九輪に「無量」、笠部に「佛」、塔身に「智」の銘がある。	1642	石銀Ⅲ
第13図	1－2		組合宝篋印塔	(26.9)	22.1		相輪伏鉢部のみ		石銀Ⅲ
第13図	1－1		一石宝篋印塔	(63.3)	26.5	元和九年 教譽妙圓 善 正月二十四日 女	相輪上部は欠損。伏鉢は表現されず請花が廻る。	1623	石銀Ⅲ

挿図番号	整理番号	旧番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦	所在
第7図	3－17	199	一石宝篋印塔	(66.0)	27.0	金清常念禅定門 ○○○○○○○菩薩也 寛永十七年		1640	石銀Ⅲ
第7図	3－16	204	組合宝篋印塔	71.2	18.5		相輪の上半部は欠損。伏鉢は表現されず請花が廻る。笠部に「火」、塔身に「水」、基礎に「地」の銘あり		石銀Ⅲ
第7図	3－15		板石	9.5	50.0		相輪部のみ。伏鉢上に突帯＋請花があり、宝珠下に請花が廻る。九輪に梵字「バン」「キリーク」、伏鉢に「サク」「サ」あり。「バン」は朱が残る		石銀Ⅲ
第7図	3－14	186	一石宝篋印塔	95.2	26.2	慶長五□年 評譽道證 敬白 三月十六日	相輪部伏鉢上は突帯のみで、宝珠下には請花が廻る。	1600	石銀Ⅲ
第7図	3－13	220	組合宝篋印塔	20.5	21.6		塔身のみ		石銀Ⅲ
第6図	3－12	178	組合宝篋印塔	26.4	40.0		笠部のみ。軒に梵字「ラ」がある。背後に110×90cm程度の基壇あり。		石銀Ⅲ
第13図	2－11	170	組合宝篋印塔	30.5	45.0		笠部のみ。軒に梵字「ラ」がある		石銀Ⅲ
第13図	2－10	171	一石宝篋印塔	90.0	27.0	寛永十四天 一捜浄圓禅定門○○ 二月十六日	隅飾りの表現は4面にあり、梵字は塔身にキリークが表される。伏鉢は表現されず蓮弁が廻り、宝珠は二段に表現され請花を持たない。	1637	石銀Ⅲ
第6図	3－9		組合宝篋印塔	(8.0)	35.0		笠部上半のみ		石銀Ⅲ

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
副書名	石銀地区墓Ⅲの調査
巻次	
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
シリーズ番号	12
編執筆者	岩橋孝典
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会
所在地	〒690-8502　島根県松江市殿町１番地　TEL0852－22－5642 〒694-0064　島根県大田市大田町大田ロ1111番地　TEL0854－82－1600
発行機関	島根県教育委員会
発行年月	2012年３月
調査原因	石見銀山遺跡総合調査

所収遺跡名	所在地	主な時代	石造物
石銀地区墓Ⅲ	大田市 大森町	安土桃山時代～江戸時代前期	一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合宝篋印塔・無縫塔

石見銀山　遺跡石造物調査報告書12

石銀地区墓Ⅲの調査

平成24（2012）年３月

編　集　島根県教育委員会・大田市教育委員会
松江市殿町１番地　大田市大田町大田ロ1111番地

発　行　島根県教育委員会
松江市殿町１番地
URL　http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/

印　刷　株式会社 報　光　社